公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（21）

薩摩川内市街部改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高野木（たかのき）遺跡

（薩摩川内市大小路町）

2019年1月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(21) 高野木遺跡
二〇一九年一月
鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター



畝間状遺構完掘状況（A・B－8～10 区）



赤枠：平成30年調査区

高野木遺跡上空から上床山方面を臨む

序　　文

この報告書は，薩摩川内市街部改修事業に伴い，平成27年度・平成28年度・平成30年度に実施した薩摩川内市大小路町に所在する高野木遺跡の発掘調査記録です。

調査の結果，中世の所産と考えられる畝間状遺構が検出されたのをはじめ，古代から近世の遺物が出土し，多くの成果を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

本報告書の刊行にあたり，本県の埋蔵文化財保護のためにご協力いただきました国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所，薩摩川内市教育委員会，発掘調査に従事された地域の方々，整理作業に従事された整理作業員の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

平成31年１月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー 長　　前迫　亮一

報　告　書　抄　録

ふりがな	たかのきいせき
書　　名	高野木遺跡
副　書　名	薩摩川内市街部改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	浦　博司・福地　祥平
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月日	2019年１月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査起因
		市町村	遺跡番号					
高野木遺跡（たかのきいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 薩摩川内市（さつませんだいし） 大小路町（おおじょうじちょう） 67番地ほか	46215	215－527	31° 49′ 18″	130° 18′ 32″	本調査 2015.6.1～7.28 2016.5.9～5.27 2018.5.7～5.30	2,020	薩摩川内市街部改修に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高野木遺跡	散布地 生産地	古代		土師器，須恵器，内黒土師器	
		中世	畝間状遺構80条	白磁碗，土師器，古銭，五輪塔	
		近世	土坑２基	瓦質土器，陶器，陶磁器，土師質土器	
		その他		土器（縄文・弥生），土製品，砥石，和釘，軽石製品，剥片・石核	
遺跡の概要	高野木遺跡は，古代から近世の遺跡である。 遺構は，中世の畝間状遺構と近世の瓦質土器・陶磁器を伴う土坑が検出された。また，古代から近世の遺物も出土しており，当時の生活様式や川内川に隣接する立地を利用した生業を知るうえで貴重な遺跡である。				



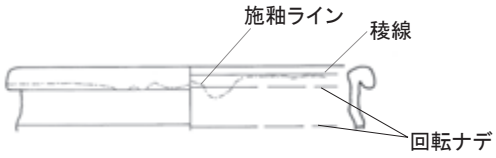
高野木遺跡位置図（S= 1 /25,000）

例　　言

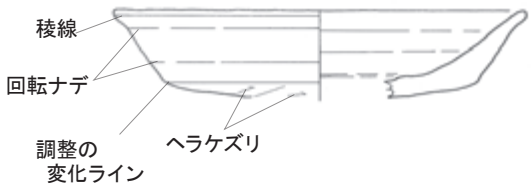
1　本書は，薩摩川内市街部改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県薩摩川内市大小路町 67 番地ほかに所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
4　発掘調査は，平成 27 年度・平成 28 年度・平成 30 年度に実施した。
5　整理・報告書作成事業は，平成 27 年度・平成 28 年度・平成 30 年度に実施した。
6　掲載遺物番号は通し番号であり，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。
7　挿図の縮尺は挿図ごとに示した。
8　本編で用いたレベル数値は，工事計画図面による海抜絶対高である。
9　遺物注記等で用いた遺跡記号は「タカノキ」である。
10　本編で使用した方位は，すべて磁北である。
11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。
12　遺構図，遺跡分布図の作成及びトレースは，浦博司が整理作業員の協力を得て行った。
13　出土遺物の実測・トレースは，福地祥平が整理作業員の協力を得て行った。
14　掲載遺物の色調については，「新版　標準土色帖」に拠った。
15　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
16　本編の執筆分担は以下のとおりで，編集は浦が行った。
　第１章　浦，福地
　第２章　浦，福地
　第３章　浦，福地
　第４章　福地，浦
　第６章　浦，福地
17　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

1　本編掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は，１グリッド（１マス）が 10 ｍ四方であり，各図に縮尺を提示してある。
2　遺構
(1) 遺構図の縮尺は，土坑が１／ 10，畝間状遺構が１／ 50 を基本とした。
(2) 遺構図の断面図については，平面図と同縮尺とした。
3　畝間状遺構の呼称について
　本遺跡においては，畠の畝に該当する部分が削平され，畝間にあたる部分が検出されたことから「畠」の名称を用いず畝間状遺構とした。
4　掲載遺物の縮尺は，１／３を基本としたが，大型のものについてはこの限りでないため，詳細は各図に提示した縮尺を参照していただきたい。
5　観察表の「胎土」における記号の表現は，確実に含まれていると判断した項目に○を付している。
6　本報告書で用いた陶磁器の表現は次のとおりである。



7　本報告書で用いた土師器・須恵器の表現は次のとおりである。



本文目次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言

第１章　発掘調査の経過……１
　第１節　調査に至るまでの経緯……１
　第２節　試掘・分布調査……１
　第３節　本調査……１
　第４節　整理・報告書作成作業……２
第２章　遺跡の位置と環境……５
　第１節　地理的環境……５
　第２節　歴史的環境……５
第３章　調査の方法と層序……10
　第１節　調査の方法……10
　第２節　層序……10
第４章　調査の成果……15
　第１節　遺構……15
　第２節　遺物……20
第５章　自然科学分析……27
　第１節　自然科学分析の概要……27
　第２節　植物珪酸体分析……27
第６章　総括……32

写真図版……33

挿図目次

第１図　周辺地形図及び試掘トレンチ配置図……３
第２図　グリッド配置図及び調査範囲……４
第３図　先行トレンチ配置図・Ⅴ層上面コンター図…４
第４図　高野木遺跡と周辺遺跡位置図……９
第５図　土層断面図（１）……11
第６図　土層断面図（２）……12
第７図　土層断面図（３）……13
第８図　遺構配置図……14
第９図　土坑１号・２号……15
第10図　土坑１号出土遺物……15
第11図　畝間状遺構①（Ａ～Ｃ－２～５区）……16
第12図　畝間状遺構②（Ａ～Ｃ－５～７区）……17
第13図　畝間状遺構③・④（Ａ・Ｂ－８～10区）……18
第14図　畝間状遺構⑤（Ｃ・Ｄ－８～10区）……19
第15図　出土遺物①……20
第16図　出土遺物②……21
第17図　出土遺物③……22
第18図　出土遺物④……23
第19図　出土遺物⑤……24
第20図　分析試料採取位置図……27
第21図　植物珪酸体含量の層位分布……30
第22図　植物珪酸体……31

表目次

第１表　平成26年度試掘調査結果……７
第２表　周辺遺跡一覧表１……７
第３表　周辺遺跡一覧表２……８
第４表　基本層序……10
第５表　土器・土師器・須恵器観察表……25
第６表　古銭観察表……25
第７表　砥石観察表……25
第８表　五輪塔観察表……25
第９表　陶磁器観察表……26
第10表　植物珪酸体分析結果……29
第11表　遺跡周辺及び自然堤防上に位置する畝間状遺構……32

図版目次

巻頭図版１　畝間状遺構完掘状況（Ａ・Ｂ－８～10区）
巻頭図版２　高野木遺跡上空から上床山方面を臨む

図版１　①調査前風景……33
　②土層断面（Ｃ・Ｄ－８～10区）……33
　③作業風景……33
図版２　①畝間状遺構検出状況（Ａ・Ｂ－５～７区）34
　②畝間状遺構完掘状況（Ａ・Ｂ－５～７区）34
図版３　畝間状遺構完掘状況（Ｃ・Ｄ－８～10区）…35
図版４　①土坑１号・２号検出状況……36
　②土坑１号埋土堆積状況……36
　③土坑１号遺物出土状況……36
　④土坑２号埋土堆積状況……36
　⑤土坑２号完掘状況……36
　⑥土坑１号・２号完掘状況……36
図版５　遺構内遺物・動物形土製品・五輪塔（笠石）37
図版６　土器・土師器・須恵器……38
図版７　陶磁器①・砥石……39
図版８　陶磁器②・瓦質土器・古銭……40

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所（以下「川内川河川事務所」という。）は，薩摩川内市街部改修事業（大小路地区引堤）及び都市計画道路中郷五代線の建設を計画し，当該事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い，文化財課が平成24年４月に分布調査を実施したところ，当該事業地内には，４か所の遺物散布地及び発掘調査の必要な地点が所在することが判明した。この結果をもとに，文化財課は，川内川河川事務所と協議し，平成26年５月に泰平寺跡隣接地（後に「高野木遺跡」と名称変更）の試掘調査を実施し，遺構の検出や遺物の出土を確認した。

この結果を受けて，高野木遺跡の本調査を文化財課から委託を受けた公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。平成27年６月１日から平成27年７月28日の期間に西側部分1,270㎡，平成28年５月９日から平成28年５月27日の期間で東側部分405㎡，平成30年５月７日から平成30年５月30日の期間で東側部分の345㎡を調査し，すべての調査を終了した。

第２節　試掘・分布調査

試掘調査は，平成26年５月27日に実施した。トレンチを５か所設定し重機を使用して掘削し，遺構及び遺物の有無を確認した。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調 査 者　鹿児島県教育庁文化財課
　　文化財主事　　黒川　忠広
　　鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課
　　文化財主事　　永濵　功治
調査協力者　薩摩川内市教育委員会文化課　　前　　幸男
立 会 者　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
　　調　査　課　　辛木　　剛

第３節　本調査

本調査は，平成27年度・平成28年度・平成30年度に実施した。調査体制の詳細については以下のとおりである。

１　調査体制

平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼係長	有村　　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第三係長	宗岡　克英
調査担当	〃	文化財専門員	吉岡　康弘
	〃	文化財専門員	井手上誉弘
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己
	〃	事業推進員	柏木　昌子

平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼係長	有村　　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第三係長	宗岡　克英
調査担当	〃	文化財専門員	吉岡　康弘
	〃	文化財専門員	石畑　浩一
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己
	〃	事業推進員	柏木　昌子

平成30年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター

		センター長	前迫　亮一
調査企画	〃	総務課長兼係長	中村伸一郎
	〃	調査課長	中原　一成
	〃	調査第三係長	三垣　恵一
調査担当	〃	文化財専門員	浦　　博司
	〃	文化財調査員	福地　祥平
事務担当	〃	主査	小牧　智子
	〃	事業推進員	川﨑　麻衣

２　調査の過程

調査の経過については日誌抄を集約して記載した。

平成27年度

６月１日　　調査開始。
６月８日～　表土剥ぎ，Ⅲ層掘り下げ。
６月22日～　土坑１・２号検出写真撮影。

6月29日～　Ⅳ層掘り下げ。
7月6日～　土坑1・2号完掘，畝間状遺構検出写真撮影。
7月13日～　土層断面実測，畝間状遺構実測開始。
7月20日～　下層確認トレンチ掘り下げ。
7月27日～　畝間状遺構実測終了。
7月28日　調査終了。

平成28年度

5月9日　調査開始。
5月11日～　Ⅲ層掘り下げ。
5月17日～　Ⅳ層掘り下げ。
5月20日　畝間状遺構検出写真撮影。
5月23日～　畝間状遺構実測開始，下層確認トレンチ①掘り下げ。
5月25日～　下層確認トレンチ②・③掘り下げ。
5月27日　畝間状遺構実測，調査終了。

平成30年度

5月7日　調査開始。
5月9日～　先行トレンチ掘り下げ（西・北壁）。
5月15日～　Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。
5月18日　土層断面実測。
5月21日～　畝間状遺構写真撮影。
5月22日　空中写真撮影。
5月24日～　畝間状遺構実測開始。
5月28日～　畝間状遺構実測終了，下層確認トレンチ掘り下げ。
5月30日　調査終了，埋め戻し開始。
6月1日　埋め戻し終了，引き渡し協議。

第4節　整理・報告書作成作業

本書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成27年度の8月1日から11月27日，平成28年度は10月1日から10月31日，平成30年度は6月1日から7月31日の期間に実施した。

調査体制の詳細については以下のとおりである。

1　作成体制

平成27年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼係長	有村　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第三係長	宗岡　克英
調査担当	〃	文化財専門員	井手上誉弘
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己
	〃	事業推進員	柏木　昌子

平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　埋蔵文化財調査センター

		センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼係長	有村　貢
	〃	調査課長	八木澤一郎
	〃	調査第三係長	宗岡　克英
調査担当	〃	文化財専門員	吉岡　康弘
	〃	文化財専門員	石畑　浩一
事務担当	〃	主査	荒瀬　勝己
	〃	事業推進員	柏木　昌子

平成30年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局川内川河川事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査総括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　埋蔵文化財調査センター

		センター長	前迫　亮一
調査企画	〃	総務課長兼係長	中村伸一郎
	〃	調査課長	中原　一成
	〃	調査第三係長	三垣　恵一
調査担当	〃	文化財専門員	浦　博司
	〃	文化財調査員	福地　祥平
事務担当	〃	主査	小牧　智子
	〃	事業推進員	川﨑　麻衣

2　整理作業の経過

整理作業の経過については，日誌抄を集約して記載した。

平成27年度

8月　遺物の洗浄・選別・注記・接合・実測・拓本。
9月　実測・写真整理・復元・土層断面トレース。
10月　実測・写真整理・遺物トレース・原稿執筆。
11月　実測・遺物トレース・原稿執筆。

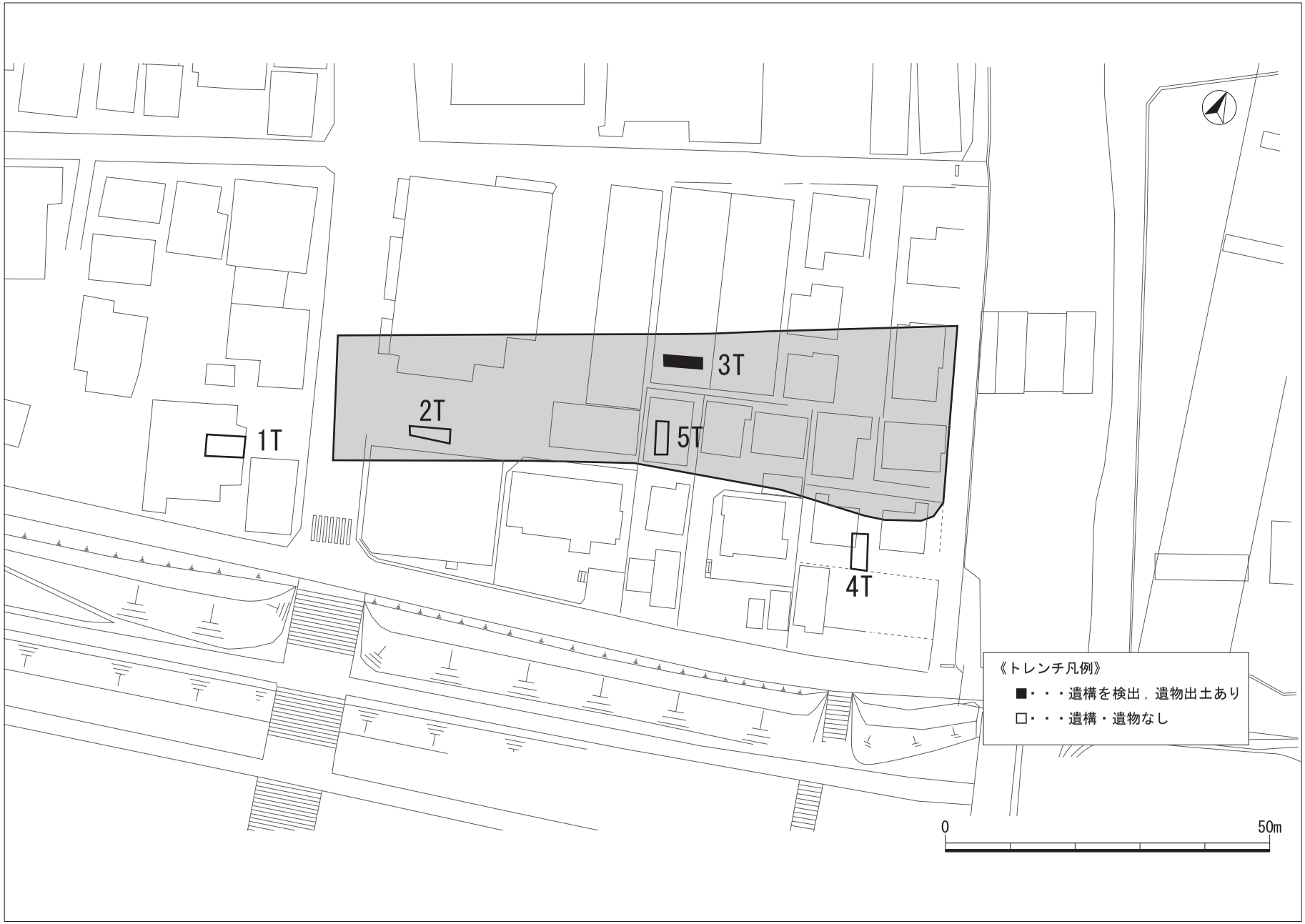
平成28年度

10月　遺物の選別・注記・分類・実測・拓本・遺構トレース。

平成30年度

6月　遺物の洗浄・選別・注記・接合・実測・拓本。
7月　実測・拓本・遺構トレース・レイアウト・原稿執筆。

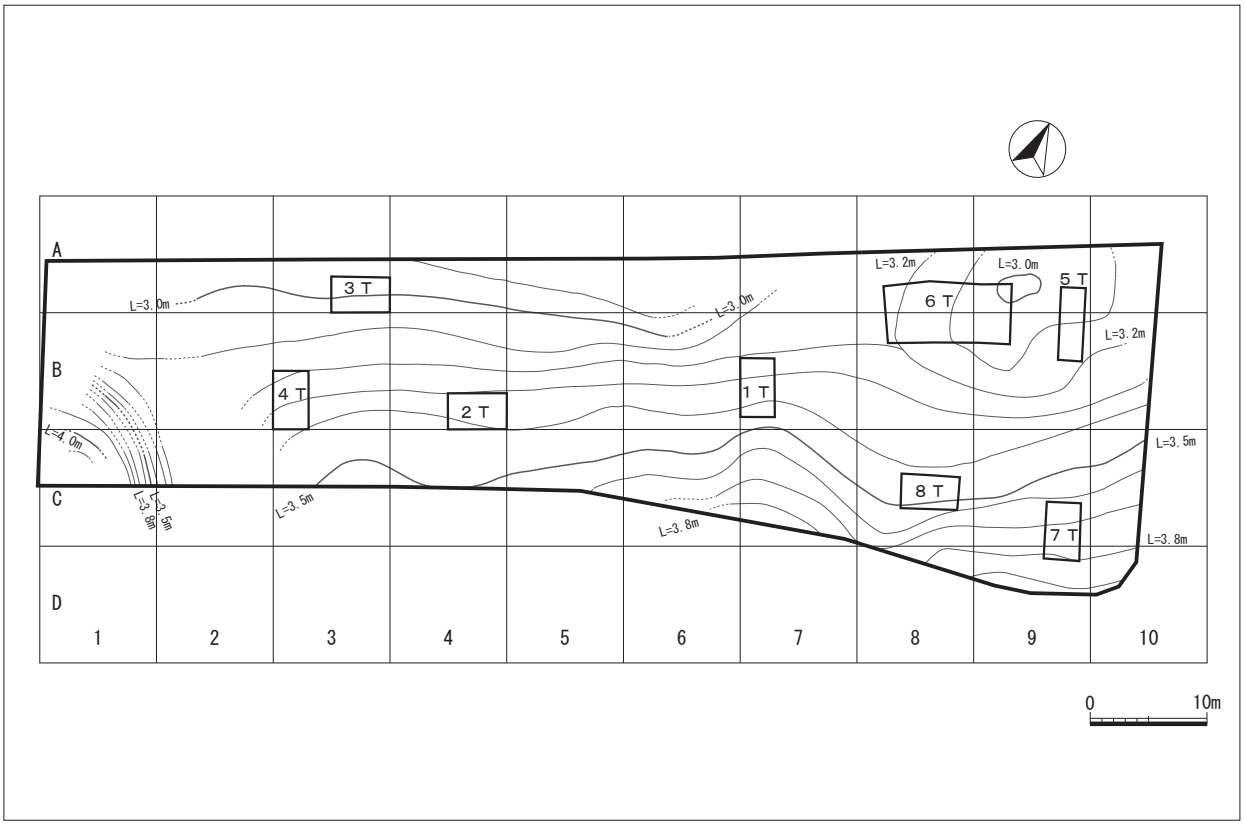
報告書作成指導委員会
　平成30年8月7日（火）　中原調査課長ほか5名。
報告書作成検討委員会
　平成30年8月9日（木）　前迫センター長ほか5名。



第１図　周辺地形図及び試掘トレンチ配置図



第２図　グリッド配置図及び調査範囲



第３図　先行トレンチ配置図・Ⅴ層上面コンター図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

高野木遺跡は，薩摩川内市大小路町に所在する。

薩摩川内市は，平成16年10月12日に川内市・樋脇町・入来町・東郷町・祁答院町・里村・上甑村・下甑村・鹿島村の１市４町４村が合併して誕生した総面積68,350㎢の市である。鹿児島県の北西部に位置し，北は阿久根市・出水市・さつま町，東は姶良市，南はいちき串木野市・鹿児島市・日置市に接し，西側は東シナ海に面している。九州では筑後川に次いで長流の川内川が市域の中心部を貫流する。古代以来，陸上・水上交通の要所であり，現在も北薩地方の経済・商業の中心地である。

市街部は，三方を山地で囲まれた盆地状の地形をなしている。北および北東部には鹿倉山を中心とする標高約500ｍの出水山地，東部には上床山（寺山）を中心とする標高約300ｍの山地が連なる。南部には，古くから修験場としても著名な冠岳を主峰とする，標高約500ｍの山地や弁財天山を最高峰とする高江山地が連なる。これらの山々は，川内川が注ぐ東シナ海側に向かって開けている。中央部には熊本県球磨郡白髪岳に源を発し，宮崎県えびの市・鹿児島県伊佐市を経由し，県内最大の河川である川内川とその支流によって形成された沖積平野が広がる。この沖積平野は川内平野や川内盆地と呼ばれ，山地・台地が多く平野の少ない南九州においては，大口盆地・出水平野・肝属平野などと肩を並べる穀倉地帯となっている。

川内平野には谷口付近に一般の大きな河川でみられる扇状地は明瞭には分布せず，自然堤防地帯が発達する。しかし，川内川は自然堤防地帯に特徴的な蛇行河道をとらず，比較的直線状に流れる。扇状地の発達が悪いことは，薩摩半島南部の万之瀬川下流域の平野にも共通し，平野への礫質で粗粒な堆積物質の供給が少ないことを示している。このことで，川内川周辺では谷口付近から自然堤防と後背湿地が広く分布する平野を形成している。

川内川の下流域の地質は，概ね安山岩により形成されている。旧石器時代（約29,000年以前）に，姶良カルデラから噴出した火砕流によって生じたシラス台地が散在している。このシラス台地は，沖積平野と山地との中間に発達しているが，あまり広くは残存せず，各地に低い台地として散在しているにすぎない。元来は一つの大きな堆積面を形成していたが，川内川およびその支流によって浸食されたと考えられる。権現原台地や国分寺台地のように平野を取り巻くように発達している低いシラス台地は，宅地や畑地として利用されている。このようなシラス台地は，河川よる浸食を受け狭小な谷底平野が発達するとともに，台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなして沖積平野へと移行する。川内川の両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約８㎞に渡って自然堤防が形成され，それが最も発達した大小路町・向田町周辺は現在の薩摩川内市街地の中心部となっている。また，川内川は下流で大きく川幅を広げ，河口の両岸には川内砂丘が発達し，薩摩川内市の特徴的な地形の一つとなっている。

高野木遺跡は，大小路町南側の川内川右岸に位置する細長く伸びた自然堤防上に立地する。この自然堤防域には旧河道が通り，大島遺跡も同じエリアに所在する。京田遺跡が位置する後背湿地・谷底低地，薩摩国分寺跡がある台地・丘陵と川内川に挟まれている。標高は約５ｍ程度である。遺跡部分は昭和30年代までは水田であったが，現在は２ｍほど客土が行われ，周辺居住域と同程度の標高となり，一昔前をしのぶことはできない状況である。

第２節　歴史的環境

薩摩川内市は，川内川によって形成された肥沃な平野を背景として，古くから政治・経済・文化の中心地であったことが，発掘調査や文献により明らかになってきている。川内（せんだい）という地名も，薩摩国府が置かれた地域が川内川の内側であったため「川内」と称され，対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来するといわれる。九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査では，本県では調査例の少ない平野部の遺跡調査が行われ注目された。以下，各時代ごとに概略を説明する。

旧石器時代

県内初の旧石器時代の尖頭器が出土した馬立遺跡，ナイフ形石器・細石器が出土した成岡遺跡，剥片尖頭器・ナイフ形石器・細石刃が出土した上野城跡がある。成岡遺跡と西ノ平遺跡では，加治屋園・船野型細石刃核が出土しており，川内平野における旧石器時代の様相が明らかになりつつある。

縄文時代

早期は前畑遺跡・霜月田遺跡・大野原遺跡では，中九州系の中原式土器が出土している。また，前畑遺跡では，北陸地域に分布する新崎式土器が出土している。石器は，山仁田遺跡で摘み部が３か所作り出された横形の石匙が出土しており，広域での交流があったことを示している。前期は前畑遺跡・大野原遺跡で轟Ｂ式土器，京田遺跡で曽畑式土器が出土している。中期は上野城跡で阿高式土器が出土しているが，当該期の出土量は少ない。

後期になると，遺跡数が増加する。土坑墓や骨角器が出土した麦之浦貝塚や楠元遺跡では，在地の土器である

市来式土器に伴って鐘崎式土器や北久根山式土器が多く出土しており，東シナ海に面する川内の地理的特徴をよく反映している。晩期では，計志加里遺跡で黒川式土器・組織痕土器・壺形土器が出土しているが，遺跡数は減少する。

弥生時代

前期は，前期土器や石包丁が出土した大島遺跡や石包丁・石鎌が出土した若宮遺跡から，この時期には水田稲作が行われていたことを示している。中期後半になると，京田遺跡や楠元遺跡から水田跡や鋤・鍬などの木製農具が出土していることから，この時期に水田稲作が確実に定着している。中期以降は遺跡数が増え，外川江遺跡で後期の内行花文鏡，麦之浦貝塚では後漢の破砕鏡片が出土していることから，青銅器文化の定着しない南九州の弥生社会の中では特異な地域といえる。このような発見から，川内川流域は，水田稲作の実態だけでなく，南九州における弥生文化の解明に寄与する地域であるといえる。

古墳時代

川内平野と肝属平野一帯は，いわゆる高塚古墳の分布が希薄な本県の中において，古墳文化が波及し，定着した注目すべき地域である。特に川内平野は在地性の強い地下式板石積石室と畿内系の高塚古墳が重複し，古墳文化周辺部の様相をよく現している。５～７世紀にかけて築造された地下式板石積石室墓群10基と土坑墓群が横岡古墳では検出され，副葬品として蛇行剣などが出土している。高塚古墳は，陵墓に指定されている可愛山稜，竪穴式石室の構造をもつ円墳の船間島古墳があり，御釣場古墳では石蓋土坑墓と箱式石棺墓が発見されている。また，平成21年度の天辰寺前古墳の調査では，竪穴式石室に埋葬された成人女性の人骨や貝輪などの豊富な副葬品が出土している。楠元遺跡では，古墳時代にも引き続き水田が造られるが，弥生時代の自然地形利用型の水田とは異なり，灌漑施設を備えた水利管理型のものに移行する。当該地域における古墳時代の集落については調査例が少ないが，成岡遺跡では19基，麦之浦貝塚では16基の竪穴住居跡が発見されている。

古代

奈良時代，741年の聖武天皇の発願によって，薩摩国府に隣接して薩摩国分寺が建立されて以来，薩摩国における政治・文化の中心地となった。1968 ～ 1970年にわたって実施された発掘調査によって，平安期･鎌倉期に再建が行われた状況や伽藍配置が大和川原寺式であることが判明している。また，国分寺跡北方１㎞には，国分寺創建時の瓦を焼いた鶴峯窯跡がある。瓦窯は２基検出され，形態はロストル式と呼ばれるものである。瓦窯とともに須恵器窯１基も発見されている。京田遺跡では，「告知札」と呼ばれる木簡が県内で初めて出土した。木簡には「嘉祥三年」（西暦850年）という年銘のほか，郡司から在地の有力者に水田の差し押さえを告知する内容が墨書されている。条里地割をはじめとする土地支配や，地方行政の在り方を考えるうえで重要である。また，高城郡の中心部を構成すると考えられる集落跡が発見された大島遺跡，鍛冶炉から多くの鉄製品が出土した鍛冶屋馬場遺跡がある。西ノ平遺跡では，多数の掘立柱建物跡が検出され，墨書・刻書・焼塩土器・帯金具などが出土し，川骨遺跡では人面墨書土器が出土しており，薩摩郡衙との関係が注目されている。

中世

鎌倉時代から室町時代にかけては，島津氏・渋谷氏の鎌倉武士と武光氏ら在地領主間の領地支配をめぐる争いが絶えなかった。これらの諸氏は，南北朝の動乱を挟む激しい争いに伴って碇山城・二福城（隈之城）・高江城・百次城（上野城）などの多くの山城を築いた。その数は文献に記されているものだけでも40か所以上にのぼる。上野城跡では，多くの掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡・土坑墓などが検出されている。これらの争乱は，戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終焉を迎える。その後，天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津追討に伴い，平佐城において激しい戦いが繰り広げられた。この戦いは，豊臣側と島津側の和睦によって終わりを迎え，大小路町泰平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も，薩摩川内の地理的な重要性を示している。中世の生活遺跡は，城下遺跡・成岡遺跡・西ノ平遺跡など多く発見されており，広域流通品も多く出土している。主なものとして，青磁・白磁・青花などの中国産の貿易陶磁器，東播系の擂鉢などの中世須恵器，長崎県西彼杵半島を産地とする滑石製石鍋などがある。大島遺跡・薩摩国分寺跡・成岡遺跡・坂ノ下遺跡・後ヶ迫遺跡では，11 ～ 12 世紀を流通の主体とする縦耳形石鍋が出土し，東シナ海に面する本地域の先進的な交流を示す重要な遺跡として注目できる。

近世

江戸時代には薩摩藩のもと，北郷家がこの地域を治め商業が発達した。その中心地は向田町で，水陸交通の要衛として賑わった。川内川河口の久見崎には船手奉行所が置かれ，藩の造船所があった。この地は，朝鮮の役の際に薩摩軍が船出した港として知られている。この役で夫を亡くした夫人によって始めたとされる盆踊り「想夫恋」は，1971 年に県の無形民俗文化財に指定されている。天明年間（1781 ～ 1788 年）には，伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は，肥前有田の技法を取り入れ，県内各地に流通し隆盛を誇った。近年の鹿児島大学による調査で，作業小屋・石垣・窯の形態が明らかになっている。昭和初期に廃窯になるまで，薩摩川内の伝統工芸品を生み出していた窯跡は，市の文化財（史跡）に指定されている。このほか，近世・近代の鍛冶遺跡として古原遺跡・鍛冶屋馬場遺跡がある。このように川内川は，平佐焼や鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され，古来より商工業の発

展に大きな役割を担ってきた。木場茶屋町には，藩政時代に藩主が参勤交代などで東上する際の休憩所（茶屋）が置かれ，隈之城郷には郷士集落である麓が形成された。

＜参考・引用文献＞

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(68)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(80)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『京田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(82)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『山仁田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(174)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『山口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(179)

川内郷土史編さん委員会1976『川内市史』

埋蔵文化財調査センター 2014『堀之内遺跡』埋蔵文化財調査センター報告書（２）

第１表　平成26年度試掘調査結果

トレンチ番号	規模	造成土・旧表土厚	造成土・旧表土下層	調査最下層	調査深度	調査結果
１トレンチ	1.8m×3.5m	36cm	Ⅱ	Ⅷ	198cm	遺構・遺物なし
２トレンチ	1.1m×2.0m	50cm	Ⅲ	Ⅷ	213cm	遺構・遺物なし
３トレンチ	0.9m×3.2m	40cm	Ⅲ	Ⅶ	185cm	土坑内から五輪塔の火輪が出土
４トレンチ	1.7m×3.6m	100cm	Ⅲ	Ⅶ	236cm	遺構・遺物なし
５トレンチ	1.1m×4.8m	110cm	Ⅲ	Ⅴ	210cm	遺構・遺物なし

第２表　周辺遺跡一覧表１

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	高野木	大小路町	自然堤防	古代～近世	畝間状遺構，土器，陶器	本報告書
2	原田	原田町	平地	古代～近世		
3	東大小路Ａ	東大小路町下目ほか	微高地	古墳～室町	土器，青磁，染付	
4	東大小路Ｂ	東大小路町大島馬場ほか	微高地	古墳～室町	土器，青磁，染付	
5	大島	東大小路町大島	自然堤防	縄文～近世	竪穴住居跡，土器，土師器，須恵器，布目瓦，硯，石製丸鞆，金環	平成12年度発掘調査
6	泰平寺跡	東大小路町外原	平地	平安～江戸		
7	薩摩国分寺跡	国分寺町大都・下台	台地	奈良～平安	国分僧寺跡（伽藍基檀跡・築地跡）	国指定史跡
8	薩摩国分寺下	中郷町京田		奈良～近世		
9	京田	中郷町	湿地	弥生～鎌倉	水田跡，杭列，弥生土器，土師器，木簡，木製品	平成12年度発掘調査
10	計志加里	中郷町計志加里・鶴峯・東郷牟田	台地	縄文～江戸	掘立柱建物跡，道跡，方形周溝墓，土師器，須恵器	平成12年度発掘調査
11	鶴峯窯跡	中郷町鶴峯	丘陵端	奈良	窯跡，国分寺瓦	昭和41年発掘調査，国指定史跡
12	亀ヶ城	中郷町山崎	丘陵	不明		消滅
13	国分寺台地	御陵下町風口・下原・入来ほか	台地	縄文～江戸	土器，須恵器，土師器，青磁，染付	
14	薩摩国府推定域	御陵下町・国分寺町	台地	縄文～江戸	土器，須恵器，土師器，布目瓦，青磁	六町四方の庁域
15	風口経塚	御陵下町風口	丘陵	戦国	経塚跡	
16	越ノ巣	御陵下町越ノ巣	丘陵	奈良～平安	蔵骨器	昭和61年調査
17	屋形原	御陵下町屋形原	丘陵	奈良～平安	蔵骨器	消滅
18	水引城跡	御陵下町本城・東之城	丘陵	室町～戦国		消滅
19	小松城跡	宮内町小松城	丘陵	不明		消滅
20	端陵	宮内町 1935 番２	丘陵	古墳	前方後円墳	昭和62年測量
21	中陵	宮内町 1935 番２	丘陵	古墳	前方後円墳？	
22	弥勒寺跡	宮内町八播馬場	平地	平安		消滅
23	清水経塚	宮里町清水	丘陵	平安	経塚跡	

第３表　周辺遺跡一覧表２

24	別府	五代町別府	微高地	古墳～室町		
25	平佐焼窯跡群	天辰町皿山	丘陵	江戸～明治	窯跡，染付，窯道具	平成11年度発掘調査 市指定史跡
26	天辰原	天辰町才原ほか	台地	古墳～江戸	土器，須恵器，青磁	
27	時吉	天辰町時吉	自然堤防	弥生～近世	土器，陶磁器，軽石製品	
28	古原	天辰町古原	台地	古墳～江戸	土器，須恵器，染付	
29	天辰寺前古墳	天辰町寺前	台地	古墳～近世	土器，土師器，陶磁器，銅鏡，刀子	平成21年度発掘調査
30	碇山城跡	天辰町碇山	丘陵	鎌倉	空堀跡	
31	鍛冶屋馬場	平佐町鍛冶屋馬場	平地	平安～明治	掘立柱建物跡，鍛冶炉，土器，須恵器，染付，鉄製品	平成12年度発掘調査 市指定史跡
32	平佐城跡	平佐町藤崎	丘陵	鎌倉～戦国	空堀跡，土塁跡	
33	喜入原	平佐町喜入原	台地	縄文～江戸	土器，染付，石鏃	
34	原口	田崎町原口・外園	台地	古墳～江戸	土器，須恵器，染付	
35	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器，染付，石鏃	
36	日暮丘	向田町鋒本・諏訪平ほか	丘陵	古墳～江戸	土器，須恵器，染付	
37	尾賀台	隈之城町尾賀原・古寺・後原ほか	丘陵	縄文～室町	土器，須恵器，染付，石鏃	一部貝塚
38	椙城跡	隈之城町尾賀	丘陵	不詳	堀切跡	
39	池尻	隈之城町池尻	丘陵斜面	古墳	須恵器	
40	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
41	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
42	菱川	隈之城町菱川	微高地	縄文		
43	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～古墳	土器，須恵器，石斧	
44	森殿原の宝塔	宮崎町 1834 番地	微高地	鎌倉		
45	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器，土師器，石鏃	
46	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器，土師器	
47	宮崎北原	永利町若宮東・宮崎町出居原ほか	台地	古墳～室町	土器，須恵器，陶器	
48	上中原	宮崎町上中原	台地	古墳～室町	土器，土師器	
49	石神城跡	永利町石神	丘陵	室町～戦国		
50	石神原	永利町神畑・神原ほか	台地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁	



第４図　高野木遺跡と周辺遺跡位置図（S= 1 /25, 000）

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

１　調査区の設定（第２図）

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，薩摩川内市街部改修の都市計画道路中郷五代線建設の工事用基準杭No.97とNo.98の延長線を中心に，10ｍ間隔で西から東に向かって１・２・３…，北から南に向かってＡ・Ｂ・Ｃ…と調査範囲を設定した。包含層から出土した遺物は，Ⅲ・Ⅳ層ではグリッド毎に一括し，Ⅳ層の一部は平板実測後に取り上げた。遺構に関わりのある遺物及びまとまりのある遺物については，縮尺10分の１の実測を行った。遺構は，検出状況を写真撮影した後に掘り下げ，完掘後，縮尺10分の１と50分の１で，遺構配置図は縮尺50分の１の図面を作成した。

２　調査の方法

試掘調査の結果から，Ⅴ層上面までを調査の対象とした。本調査では，調査区の大部分がⅢ層上面もしくはⅣ層上面まで削平を受けていたことから，表土・客土を重機で除去した後，残存しているⅢ～Ⅳ層をⅤ層上面まで人力で掘り下げた。遺構の調査は，移植ごて等を用いて慎重に実施し，実測・写真撮影等を行った。遺構は，埋土の状況や床面の状態，出土した遺物等をもとに担当者で検討し，総合的に判断して認定した。遺物は，Ⅲ・Ⅳ層ではグリッド毎に一括し，Ⅳ層の一部は平板実測後に取り上げた。ただし，遺構内の遺物は埋土内一括で取り上げた。

３　整理・報告書作成作業の方法及び内容

遺物の水洗いは，土器や陶磁器はブラシを用いて行った。その際，遺物に付着している重要な情報を除去することがないように注意しながら洗浄を進めた。古銭は，腐食の状況から県立埋蔵文化財センター精密処理室にＸ線写真を含め処理を依頼した。遺物の注記は，水洗い終了後順次行った。注記を行なう際，薬品を使用するため，換気に注意しながら手作業で進めた。また，これまで刊行された遺跡の記号と重複しないように，データを管理している鹿児島県立埋蔵文化財センター南の縄文調査室に確認をとり，「タカノキ」とした。遺物の接合・復元は，調査区別の遺物の抽出・分類の後に行った。土層断面や遺構のトレースについては，下図を作成し，点検・修正後にデジタルトレースを行った。遺物の実測・トレースについては，実測図の点検・修正後，トレースを行った。また，遺物によっては拓本をとり，図化に努めた。

第２節　層序

調査区の北側と南側で堆積状況に違いがあり約90㎝の比高差が生じることや，場所によって異なる層序が見られたが，比較的安定した良好な堆積状態を把握できた。平成26年度に実施した試掘調査時の層序を基本層序とした（第４表）。

第４表　基本層序

層位	色調など
Ⅰ層	表土
Ⅱ層	灰褐色グライ化層
Ⅲ層	茶褐色弱粘質砂層
Ⅳ層	黄茶褐色砂質土層
Ⅴ層	白色砂層
Ⅵ層	黄茶褐色砂質土層
Ⅶ層	白色砂層
Ⅷ層	黄茶褐色砂質土層
Ⅸ層	川砂利層

Ⅰ層は表土で，層厚は約20㎝から２ｍ程の客土により造成が行われた箇所もある。

Ⅱ層は灰褐色グライ化層であるが，本調査区では撹乱部に若干残るぐらいであった。

Ⅲ層は茶褐色の弱粘質砂層である。調査区北側及び西側において，Ⅱ層とⅢ層の間に，Ⅲ層土よりやや白味を帯びた茶褐色の層が堆積していた。当該層が見られる土層断面図にはこの層をⅢa層，従来のⅢ層はⅢb層と分けて表記した。

Ⅳ層は，黄茶褐色の砂質土層である。

Ⅴ層は，白色砂層である。

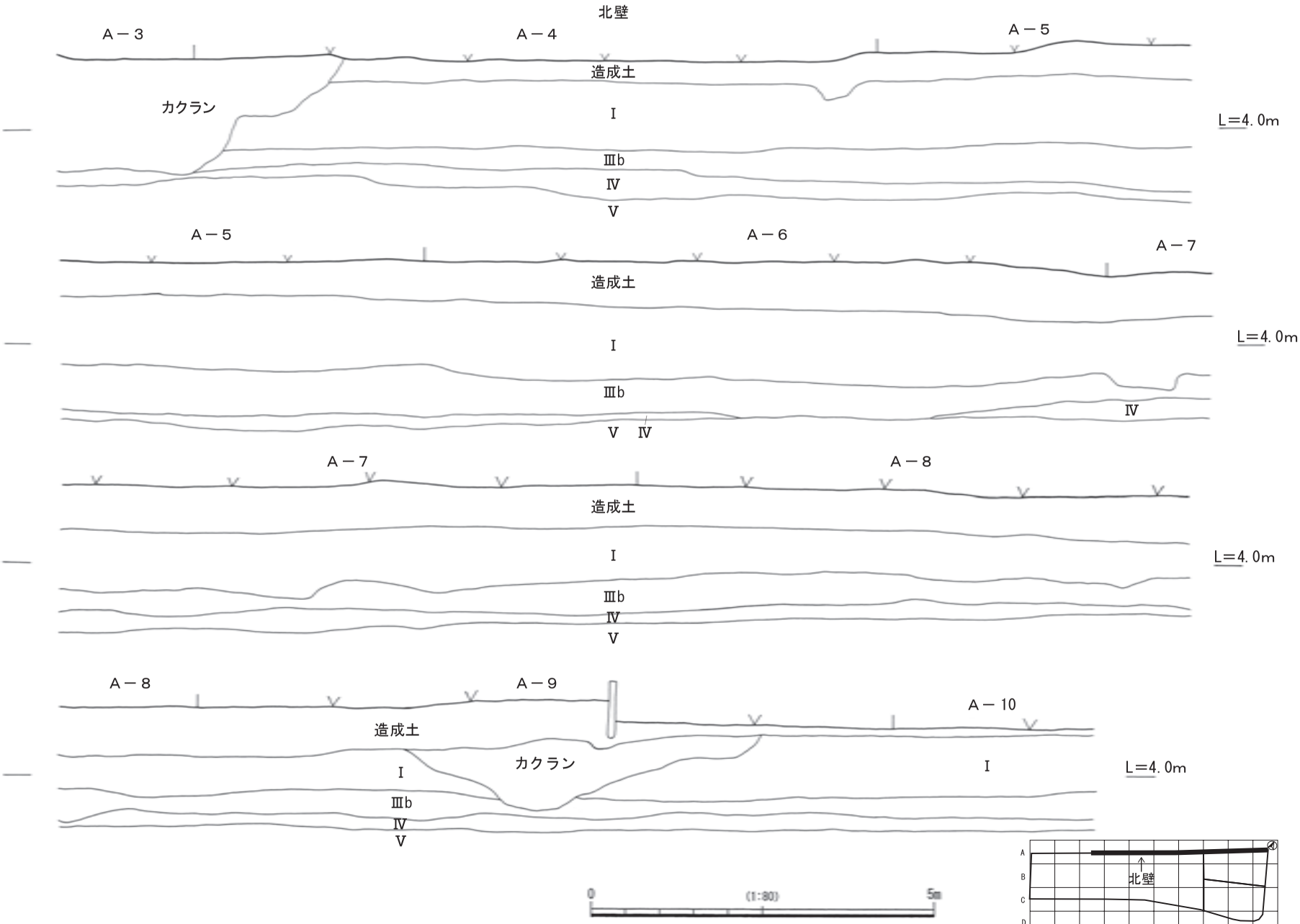
Ⅵ層は，黄茶褐色の砂質土層で，やや粘性がある。

Ⅶ層は，白色砂層である。Ⅴ層より暗い。

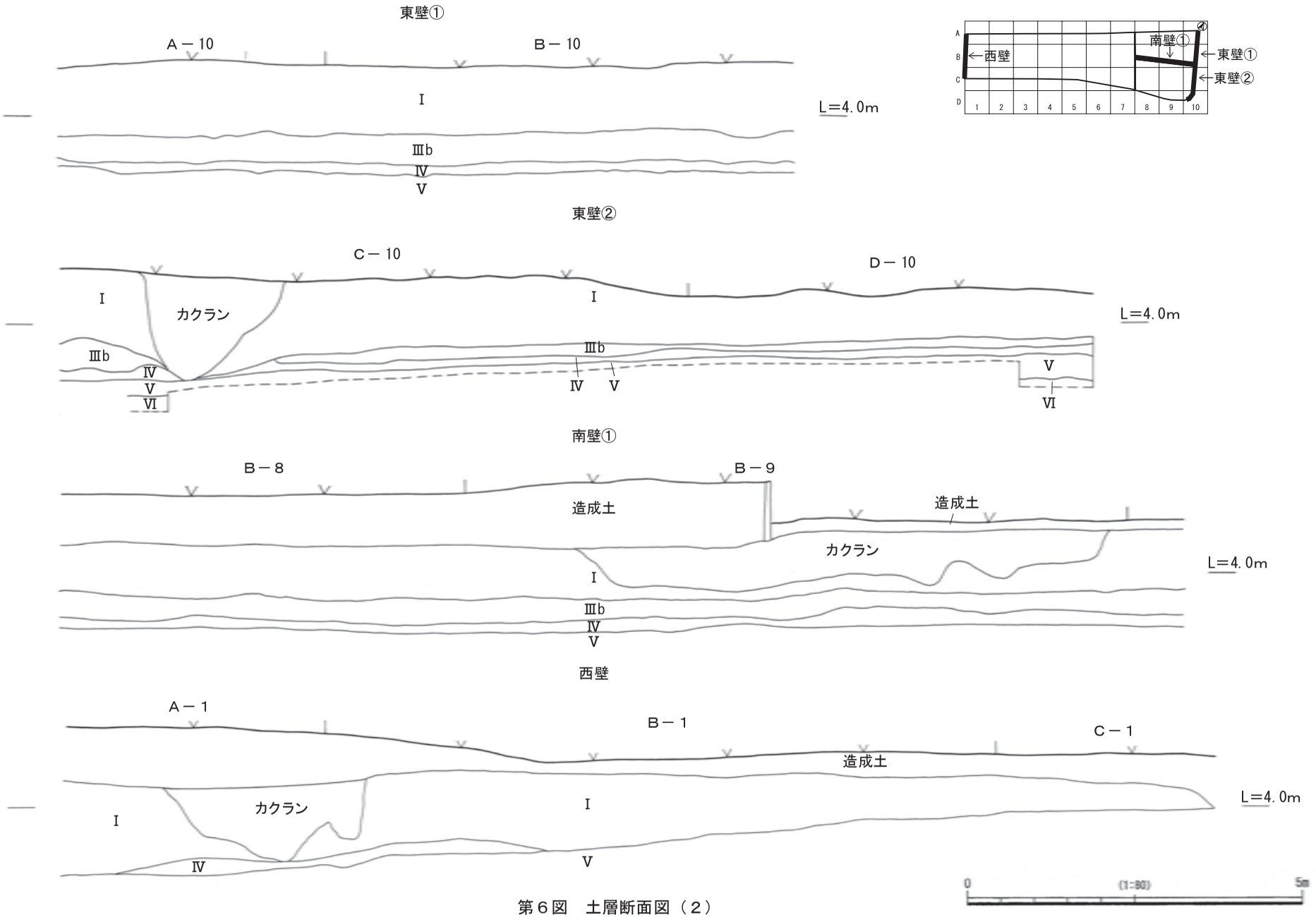
Ⅷ層は，黄茶褐色の砂質土層である。Ⅶ層より暗い。

Ⅸ層は，川砂利層である。

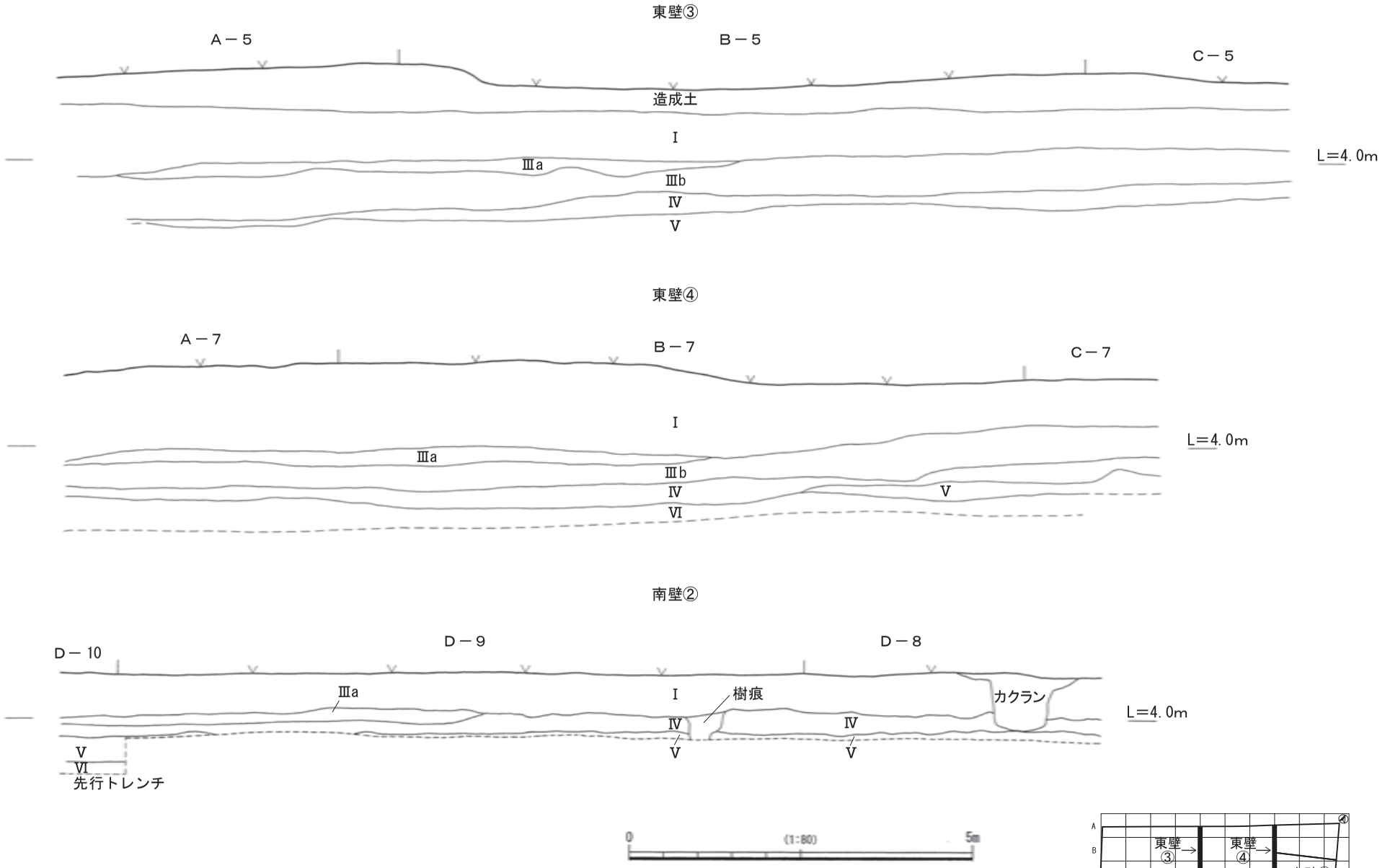
Ⅴ層上面までを調査対象とし，Ⅴ層以下の層については先行トレンチを設定して，Ⅷ層もしくはⅨ層までの掘り下げ確認を行った。（H27年度５か所・H28年度１か所・H30年度２か所）


北壁
A－3
A－4
A－5
造成土
カクラン
I
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
L＝4.0m
A－5
A－6
A－7
造成土
I
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅳ
L＝4.0m
A－7
A－8
造成土
I
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
L＝4.0m
A－8
A－9
A－10
造成土
カクラン
I
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
I
L＝4.0m
0
(1:80)
5m
北壁
A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

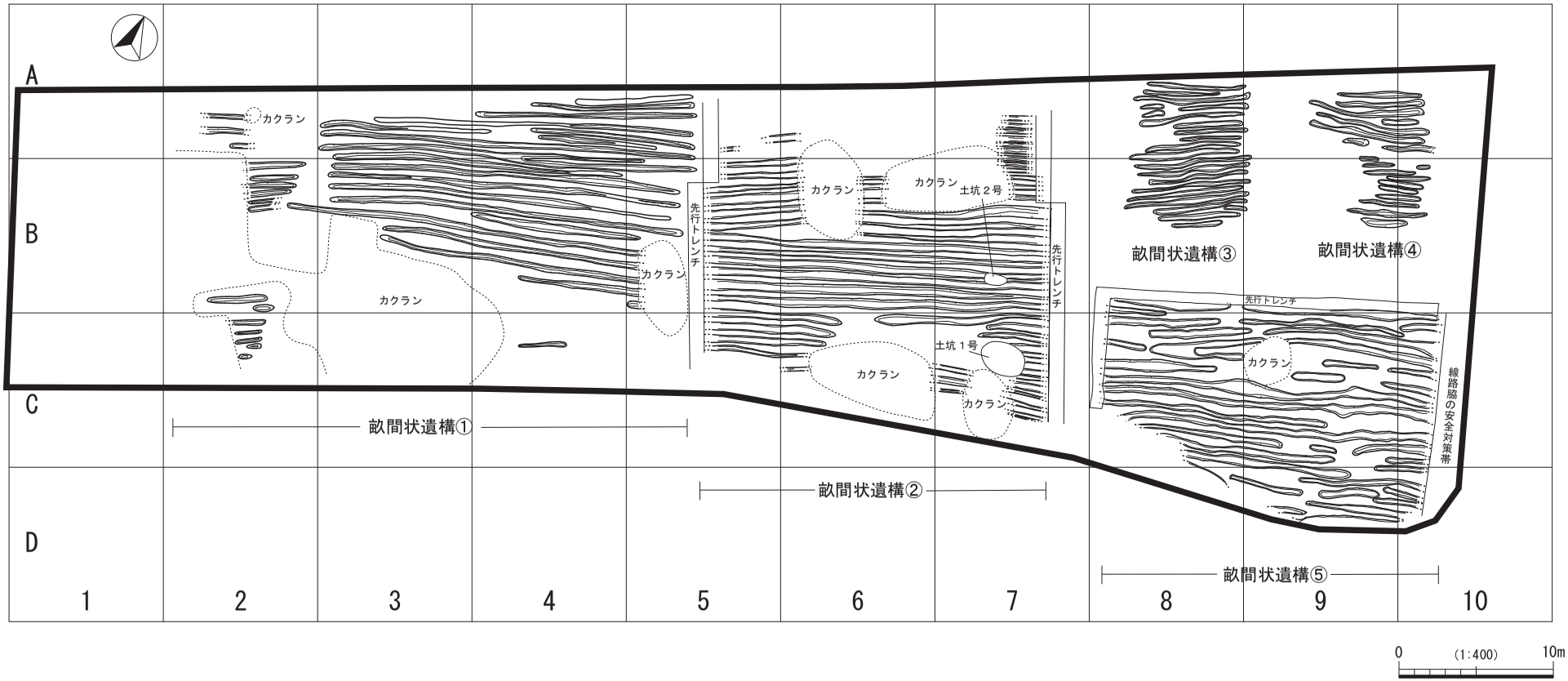
第５図　土層断面図（１）


東壁①
A－10
B－10
I
L=4.0m
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
西壁
南壁①
東壁①
東壁②
東壁②
C－10
D－10
I
カクラン
I
L=4.0m
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅴ
Ⅵ
南壁①
B－8
B－9
造成土
造成土
カクラン
L=4.0m
I
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
西壁
A－1
B－1
C－1
造成土
L=4.0m
カクラン
I
I
Ⅳ
Ⅴ
0
(1:80)
5m

第６図　土層断面図（２）


東壁③
A－5
B－5
C－5
造成土
Ⅰ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
L＝4.0m
東壁④
A－7
B－7
C－7
Ⅰ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
L＝4.0m
南壁②
D－10
D－9
D－8
Ⅲa
Ⅰ
樹痕
カクラン
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
先行トレンチ
L＝4.0m
0
(1:80)
5m
東壁③
東壁④
南壁②
A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

第７図　土層断面図（３）


A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
先行トレンチ
先行トレンチ
土坑２号
土坑１号
畝間状遺構①
畝間状遺構②
畝間状遺構③
畝間状遺構④
畝間状遺構⑤
先行トレンチ
線路脇の安全対策帯
0
(1:400)
10m

第８図　遺構配置図

第４章　調査の成果

第１節　遺構（第８図）

土坑２基，畝間状遺構約80条を検出した。

１　土坑（第９図）

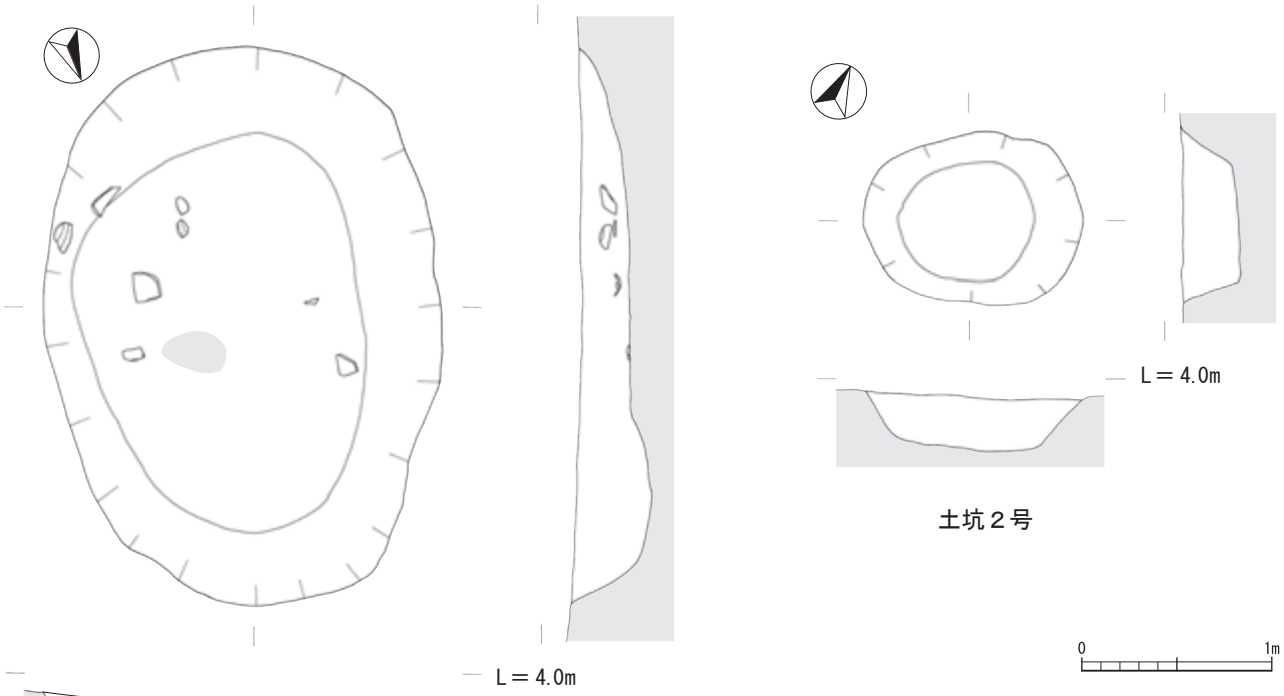
Ⅳ層上面において，土坑が２基検出された。

土坑１号

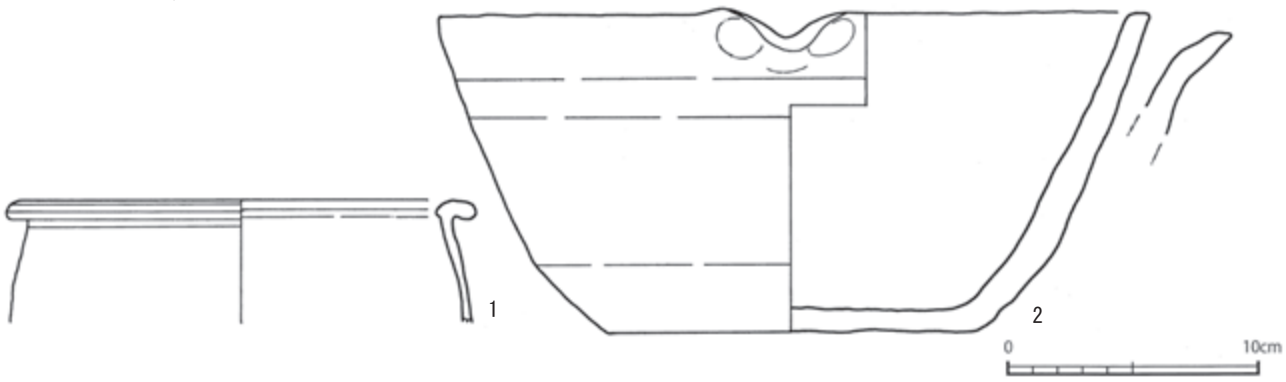
平面形は290㎝×210㎝の楕円形を呈する。深さは40㎝で断面形は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平面と同形状で平坦である。埋土はⅢ層である。中央部に30㎝×20㎝の範囲で焼土が確認できた。埋土中から，近世の瓦質の擂鉢，堂平窯産の薩摩焼（第10図）が出土したことから，17世紀以降の遺構である。１は，薩摩焼の甕で堂平窯系である。口唇部はＬ字状を呈し上面は丸みを帯びる。口唇部は釉を剥ぎ取っている。口縁部から肩部までの形状から，底部へ向けてやや膨らみをおびていく器形と考えられる。口径は約17.5㎝である。２は瓦質土器の擂鉢である。片口を成形した際の指頭圧痕が残る。内面は使用による擦りへりによって櫛目は残っておらず，特に内面の底部は剥落が激しい。口縁は直口し，外面にはヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。腰部には削り出しの痕跡が稜線となって強く残る。

土坑２号

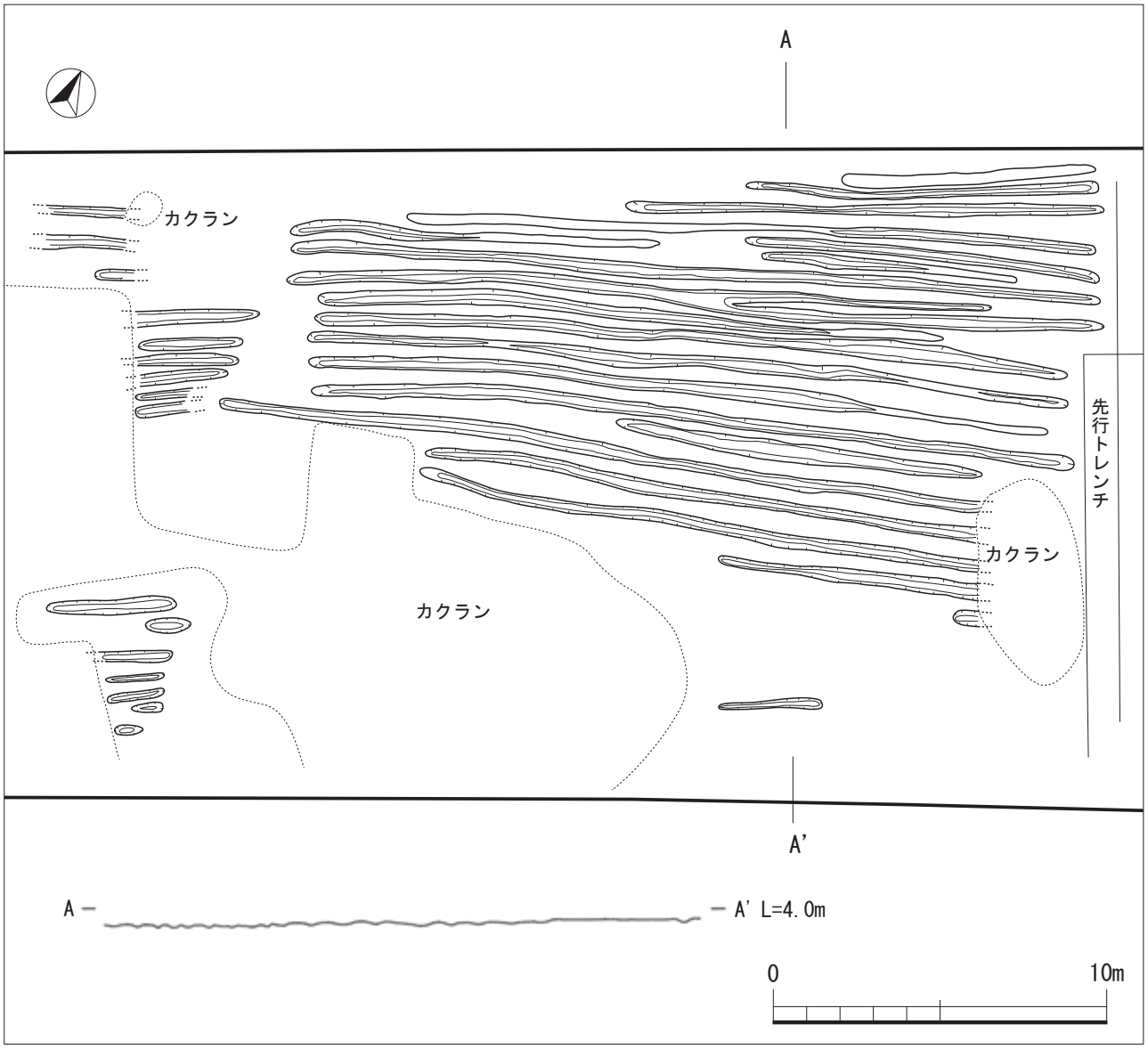
平面形は115㎝×90㎝の楕円形を呈する。深さは28㎝で断面形は台形状を呈する。底面は検出面と同形状で平坦である。埋土はⅢ層である。土坑１号の北北西3.8ｍに位置する。埋土から遺物は出土していない。



第９図　土坑１号・２号



第10図　土坑１号出土遺物



第11図　畝間状遺構①（Ａ～Ｃ－２～５区）

２　畝間状遺構（第11 ～ 14図）

畝間状遺構は，白色砂層のＶ層上面で検出された。畝は調査範囲のほぼ全域にわたって検出されており，川内川の流れに沿う形で東西方向を畝の基本方向に南北に並ぶ。北側の畝の一部は東西方向よりやや北寄りに傾く。

検出した規模は，長さが５ｍから20ｍを超えるものまである。本来１条の畝が途切れたと考えられるものが多いことから，遺跡周辺にも範囲を越えて横断するほど広範囲に畝が作られていた可能性がある。畝幅は30 ～ 35cm程度を基本とし，北端や南端付近の畝は細く，中央で幅が広くなる傾向が見られる。断面形は浅いレンズ状を呈する。浅いものは約2.5cm，深いもので約7.5cmと全体的に浅い。

畝方向の違いや畝のまとまりから①～⑤の５群に大別した。

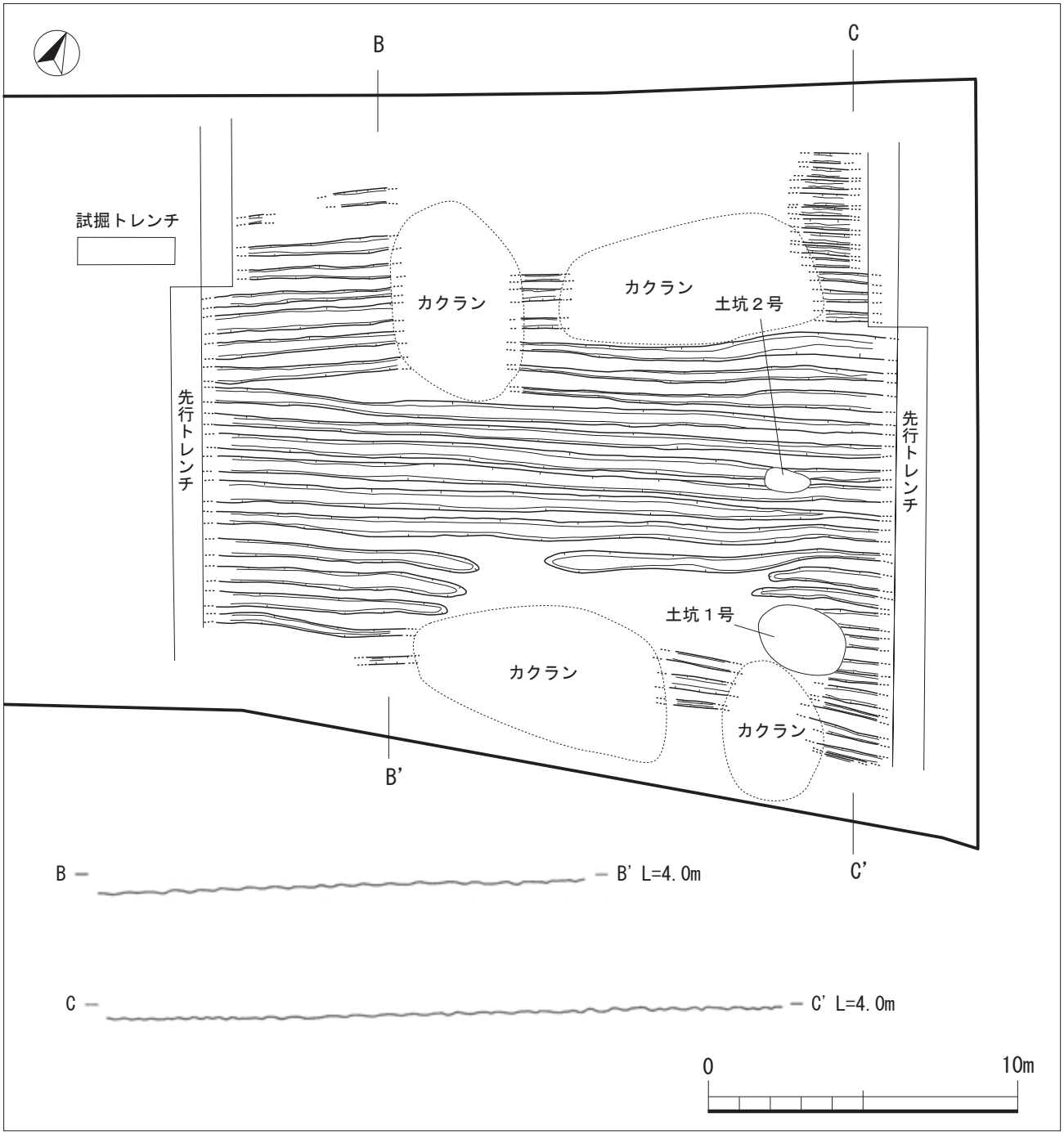
畝間状遺構①（第11図）

畝群の規模は遺跡全体の中でも良好に検出されており，長さは約23ｍを測る。幅は北側の畝で約20cm，南側で約30 ～ 40cmある。深さは約５cmである。畝の方向は東西方向が主であり，北側のものほど長さが短く，幅が

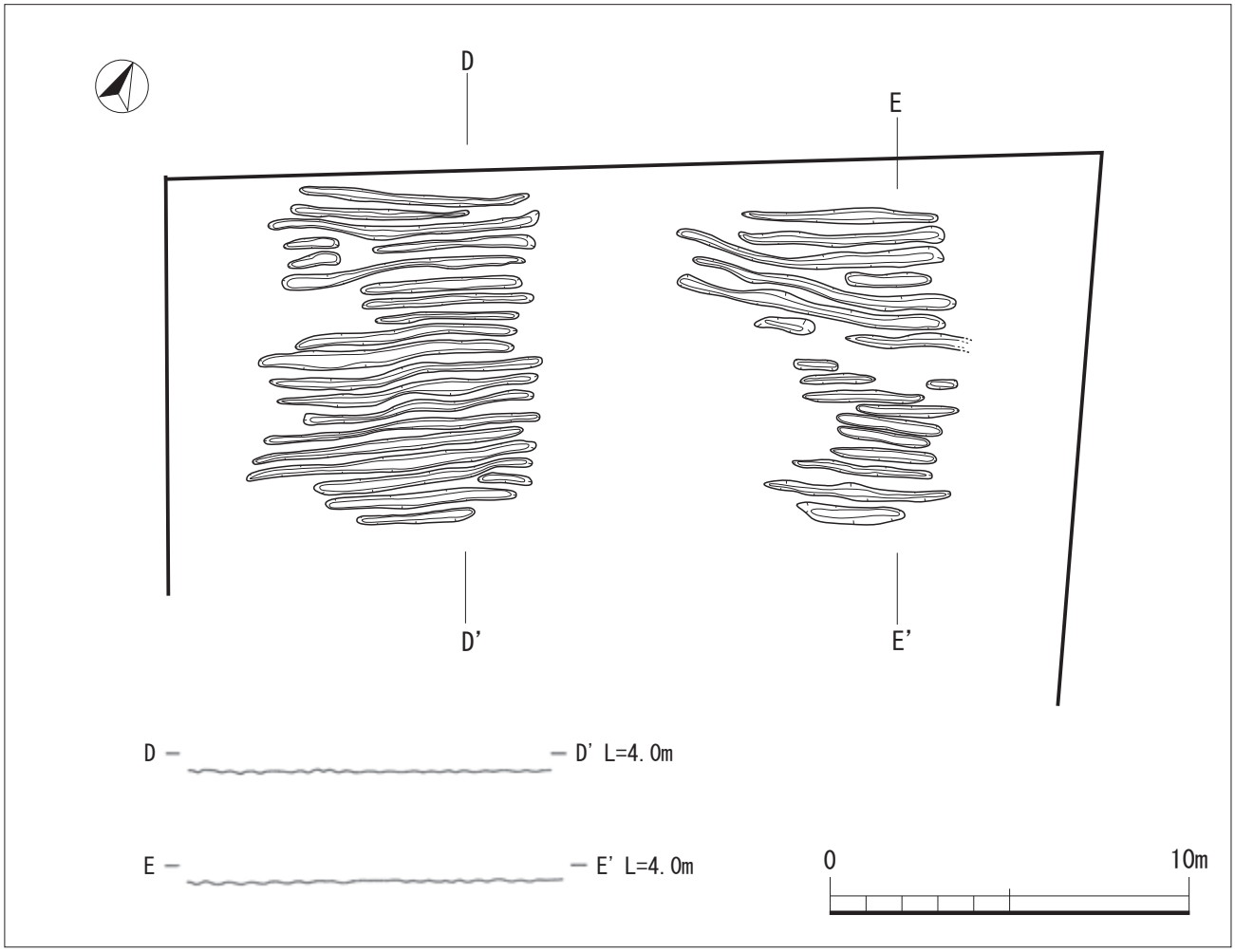
小さくなり，畝同士の間隔が密になる。

畝間状遺構②（第12図）

検出した北側，中央，南側で畝の特徴が異なる。長さは北側で約６ｍ，中央で約21ｍ，南側で約８ｍである。幅は基本的に約35㎝前後，中央でやや幅が広く約40～50㎝となる。深さは約５㎝で，北側は約2.5㎝と浅くなる。畝の方向は東西方向を主とするが，北側の畝がやや北寄りとなる。中央の畝は長さ・幅において南北の畝より検



第12図　畝間状遺構②（Ａ～Ｃ－５～７区）



第13図　畝間状遺構③・④（Ａ・Ｂ－８～10区）

出規模が大きく，並びもより規則的なものとなっている。

畝間状遺構③（第13図左）

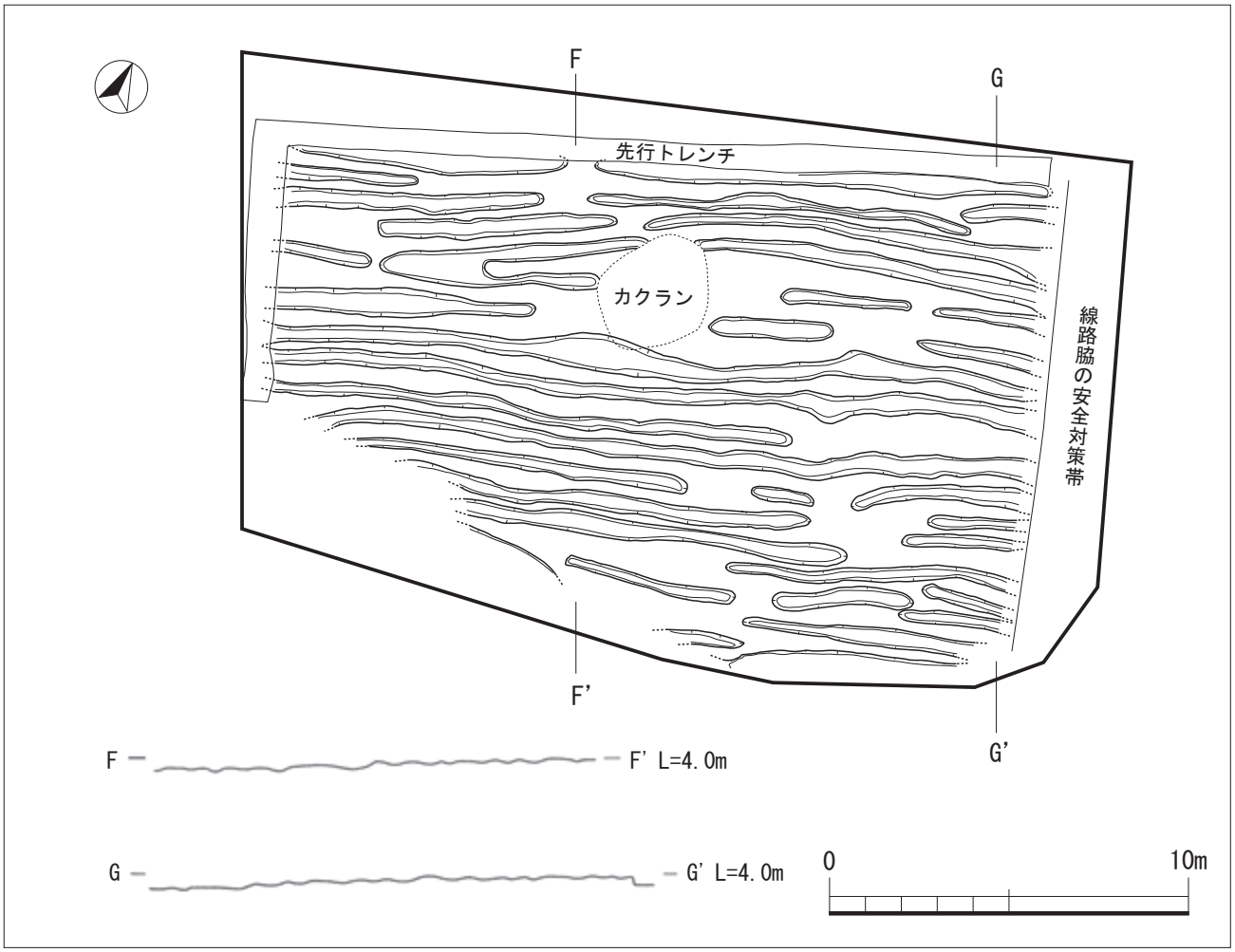
長さは５～７m程度と他の畝と比べて短く，畝が東端を揃えたように密に並ぶ。幅は25～30cm程度である。深さは2.5～５cmと浅く，断面形は薄いレンズ状を呈する。畝の方向はやや北寄りに延びる。畝の長さ，両端の位置が近似していることから，途切れた畝ではなく意図的に長さを揃えた畝のまとまりであると考えられる。

畝間状遺構④（第13図右）

長さは北側で５～７m，南側で３～５mあり，東端がほぼ揃って並ぶ。幅は北側で約40cm，南側では約30cmで，北側がやや幅が広くなる。深さは約2.5cmである。畝の方向は東西方向を基本とするが，北側の畝は北から下ってくる形で延びている。

畝間状遺構⑤（第14図）

長さは２，３m程度から15mを超えるものもあり，東側の畝は調査区外まで延びる。東西の畝の間隔は狭く，中央北側の円状の攪乱をはじめ，水の影響が所々に認められることから，本来はつながっていた畝が途切れたものと推測できる。幅は30～35cm程度あり，中ほどの畝には，幅が50cmを超えるものもある。深さは約５cmと浅く，断面形がレンズ状を呈する。



第14図　畝間状遺構⑤（Ｃ・Ｄ－８～10区）

畝間状遺構①～⑤各群の特徴として，①・②・⑤は一定の長さ，幅，方向において規格性がある一群である。中央付近は幅広の畝，南北の端に細めの畝が多くなる傾向がみられる点，③・④は短い畝のまとまりが形成されている点が挙げられる。また，①・②の南側や③・④の間などに一定の空間が看取できる。畝群を短くする，空間を設けるという意図があったとすれば，栽培する作物の違いや作業する人間の動線の確保などが想定できるが，畝間状遺構が調査区内で完結していないこともあり，決定的な判断材料に乏しく，詳細は不明である。

第２節　遺物（第15 ～ 19図）

本遺跡からは総数 252 点の遺物が出土し，51 点を図化した。

なお，掲載にあたって，縄文，古代，中世，近世，近代等，年代観の古いものから新しい順に配列している。

３は，土器片である。外面に貝殻条痕とみられる調整が施される。

４は，須恵器である。内外面にたたきの痕跡が残る。

５は，須恵器の壺の胴部から底部片である。内外面には自然釉がかかり，内面には同心円状のたたき具痕と付着物が残る。

６は，須恵器の壺である。頸部外面にたたき具による成形の痕跡が残る。焼成不良である。

７は，土師器の小皿である。内面には回転ナデの後に指ナデによる調整痕，底面には糸切りの痕跡が残る。

８は，土師器皿の底部である。底径は７㎝になる。回転糸切りによる痕跡が残る。

９は，土師器碗の高台部分である。内外面は回転ナデで調整され，底部の周縁を意図的に打ち欠いている可能性がある。

10 は，土師器皿の底部である。底径は約 9.2 ㎝になる。

11 は，白磁皿である。底径は約 5.3 ㎝になる。高台畳付の幅が広く，透明釉を剥いだ玉縁皿である。８世紀から９世紀にかけてのものと考えられる。

12 は，青磁の碗である。外面に蓮弁が施される。13 世紀から 14 世紀のものと考えられる。

13 は，青磁碗である。高台は無釉で内面の釉は蛇の目状に剥ぎ取っている。底部の周縁と高台を意図的に打ち欠いている可能性がある。

14 は，白磁皿である。口縁は外反し，内外面に透明釉が施される。荊窯産である。

15 は，白磁皿である。口縁内側の釉をかき取ったいわゆる口禿げ口縁である。

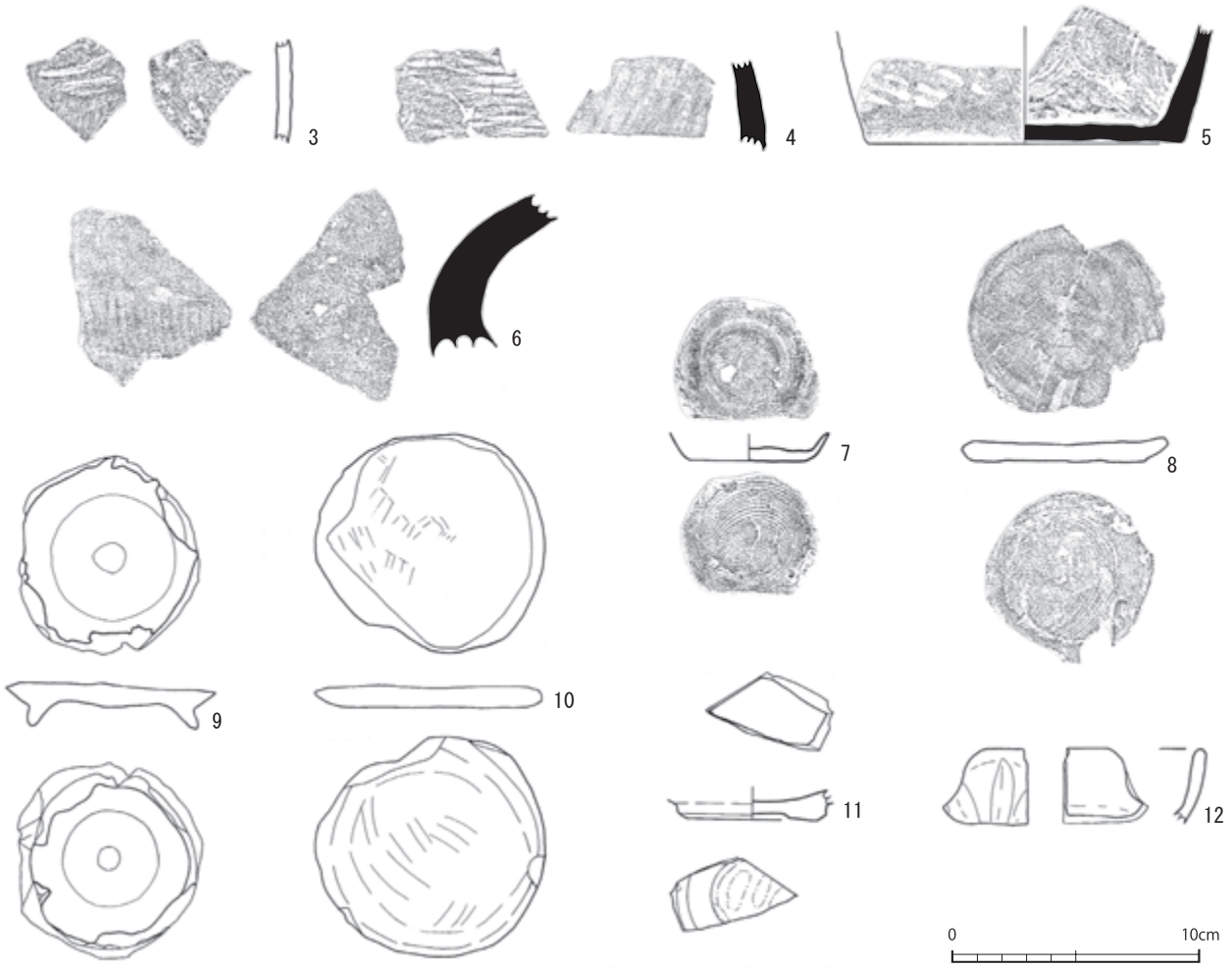
16 は，白磁の小坏の底部である。底径は約 2.4 ㎝になると予想される。

17 は，白磁皿である。底径は約７㎝になる。16 世紀のものと考えられる。透明釉が施される。

18 は，土師器皿である。内外面を回転ナデで調整されている。底面に糸切りの痕跡が残る。

19 は，須恵器の鉢もしくは壺の底部である。

20 は，青花碗である。内面見立てに図線と花文が施される。高台は削り出しで作り出され，畳付は無釉であ



第15図　出土遺物①

る。高台内面の中央部が突起状を呈する。施された花文から 16 世紀末の景徳鎮のものと考えられる。

21 は，青花碗である。口縁部はやや外反し，口縁部外面に界線が施される。内面口唇部下には四方襷文が施される。

22 は，青花碗である。口径は約 11.6 ㎝になる。16 世紀の景徳鎮のものである。

23 は，白磁皿である。底径は 8.8 ㎝になる。高台の畳付部分が尖る特徴から，16 世紀のものと考えられる。

24 は，土師器皿である。底部から直立気味に立ち上がる。底部にろくろから切り離した際に付着したと考えられる粘土塊が残る。

25 は，壺の胴部片である。外面に褐色の釉が施される。14 世紀の中国のものと考えられる。

26 は，瓦質土器の風炉もしくは火鉢である。口縁部および外面に回転ナデの痕が残り，口縁部下位に断面がかまぼこ状の２条の突帯が貼り付けられる。突帯間に縦格子の沈線がていねいに施文されている。

27 は，土師器皿である。内外面ともに回転ナデで調整されている。

28 は，中国の壺である。外面に褐色釉が施され，内面に積み上げ時のつなぎ目の跡が残る。

29 は，瓦質土器の擂鉢である。内面に櫛目が間隔をおいて施される。

30 は，天目碗である。口縁端が短く外反する。黒褐色の釉薬が施される。

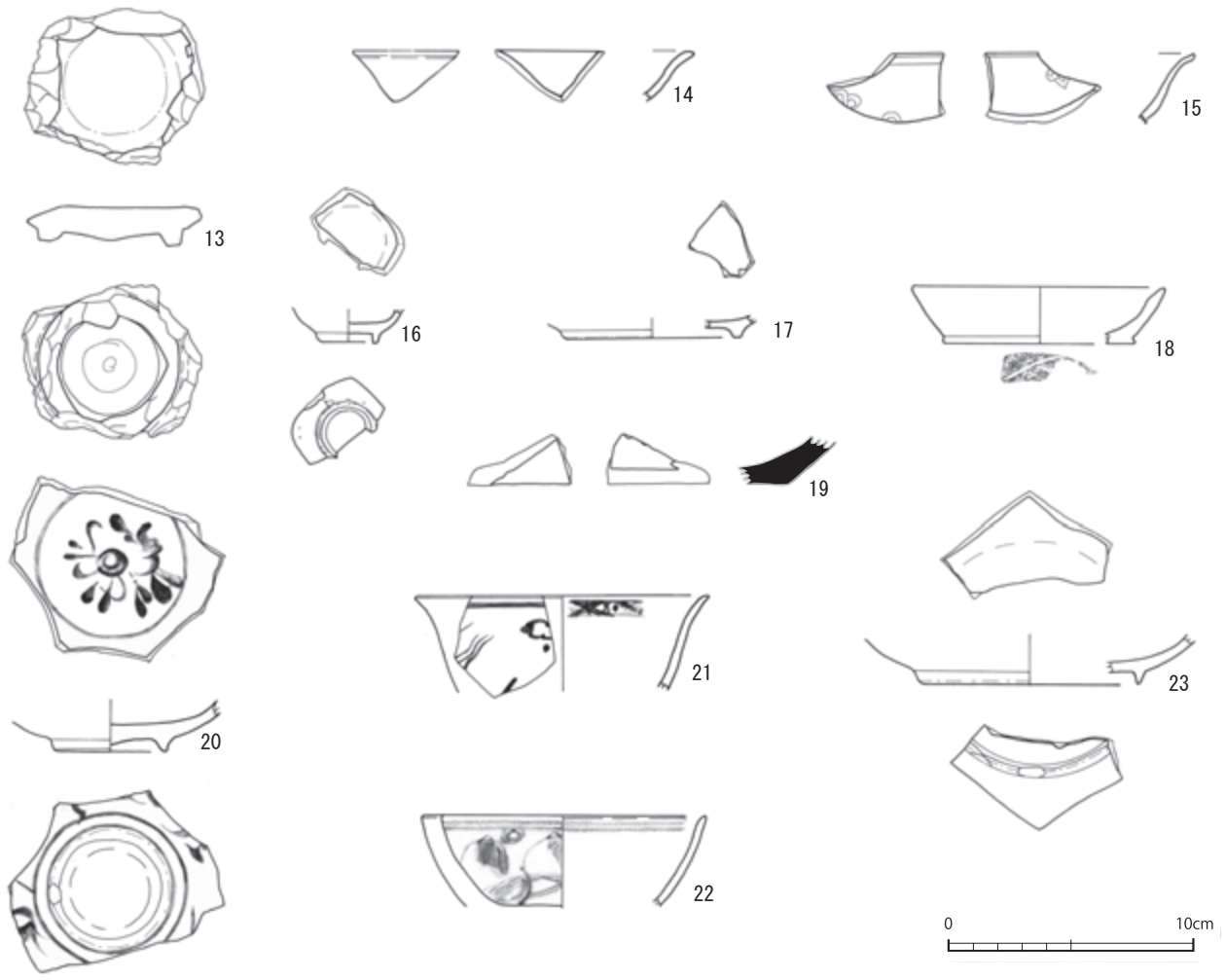
31 は，陶器の小碗である。外面上位に褐色釉を，下位に暗青灰色釉が施される。貫入が入る。

32 は，壺の底部である。底径は約 12.4 ㎝になる。内面に積み上げ時のつなぎ目の跡が残る。14 世紀の中国のものと考えられる。

33 は，陶器の胴部片である。14 世紀の中国のものと考えられる。

34 は，薩摩焼の徳利である。内面にたたきによる痕跡が残る。苗代川系のものとみられる。

35 は，薩摩焼の甕である。内外面に同心円状と平行にたたき具による痕跡が残る。薄手であり堂平窯系のものとみられる。



第16図　出土遺物②

36 は，薩摩焼の甕である。内外面に同心円状のたたきの痕跡が残る。

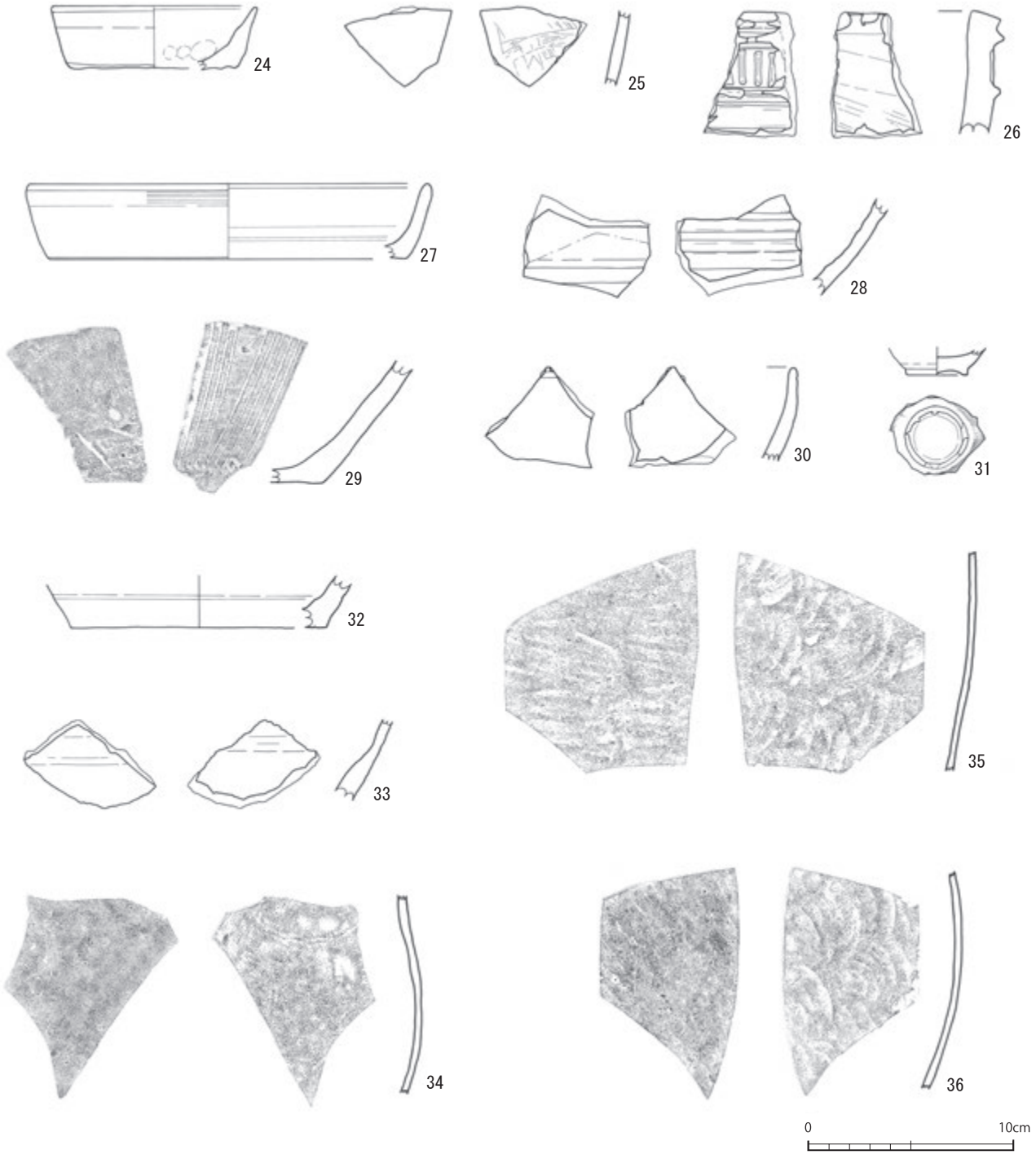
37 は，天目碗である。胴部からやや内湾気味に立ち上がり，口縁が外反する。外面にヘラケズリの痕が残り，黒褐色の釉薬が施される。

38 は，唐津焼の碗である。底径は約 4.2 ㎝になると予想される。内面は黒色釉が施され，外面は腰部から高台内面まで露胎する。

39 は，薩摩焼の擂鉢である。内面に櫛目が残る。

40 は，苗代川系の薩摩焼の甕である。口縁部を外側に折り返して肥厚させ，「T」字状を呈する。口唇部は内側を高く外側を溝縁状に成形され，口唇部上部には貝目の痕が残る。内外面に鉄釉が施される。18 世紀後半のものである。

41 は，薩摩焼の壺である。口縁部に白色釉がかかり，口唇部は釉を剥ぎ取っている。



第17図　出土遺物③

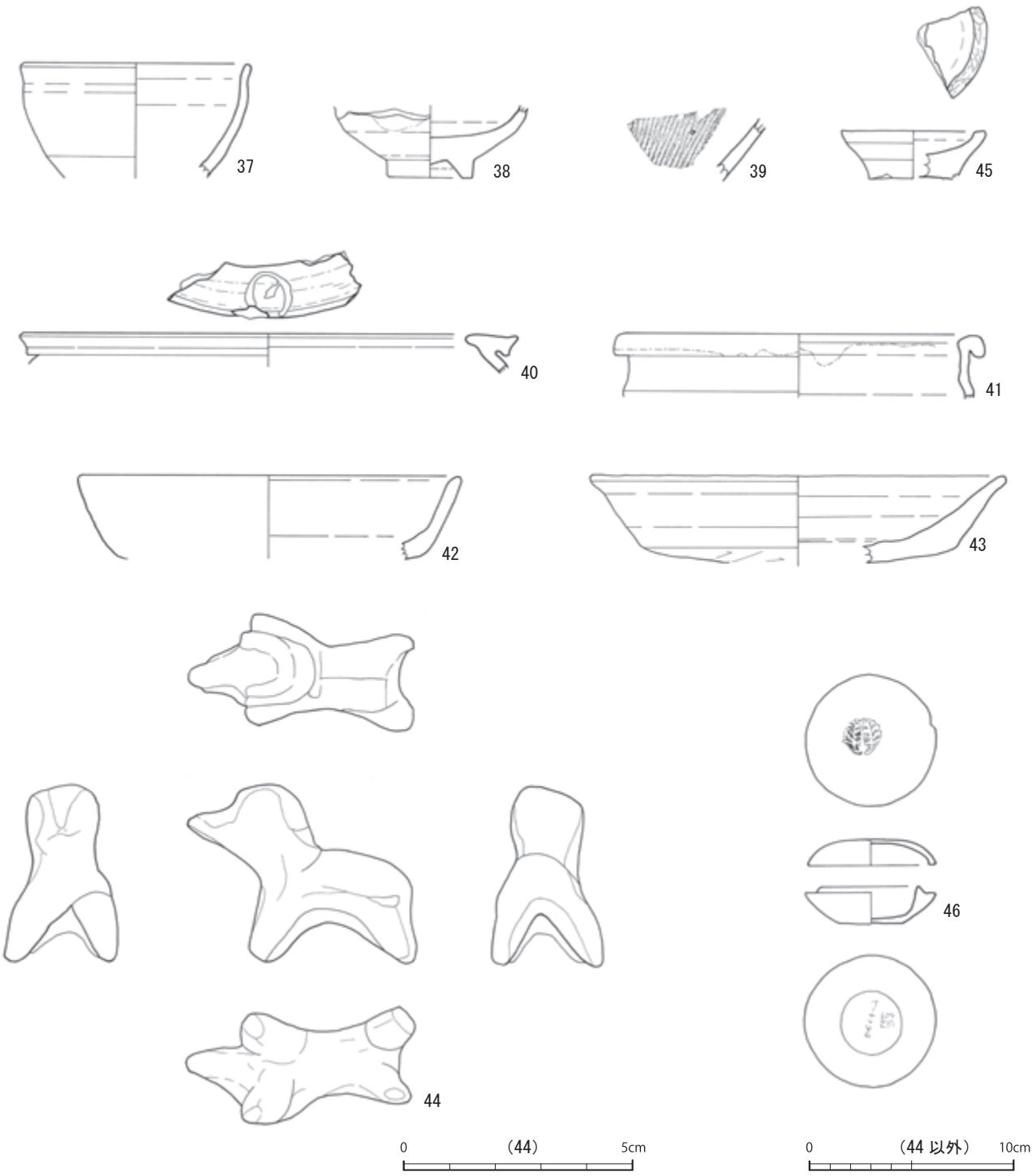
42 は，土師質土器である。内外面を回転ナデで調整されている。

43 は，土師質土器である。口縁部は先端で外反し，胴部で厚みを帯び底部中央に向かって薄くなる。内外面ともにていねいな回転ナデで形成され，腰部から底部はヘラケズリで形成された痕跡が残る。内面にわずかに煤が付着している。

44 は，犬の形をした素焼の動物形土製品である。肩部に成形痕がみられる。

45 は，平佐焼窯道具のチャツである。19 世紀のものと考えられる。

46 は，磁器の合子である。身と蓋の両方が出土している。蓋の外面上部には「抱き茗荷（みょうが）」もしくは「杏葉（ぎょうよう）」の家紋が施されている。近代のものと考えられる。



第18図　出土遺物④

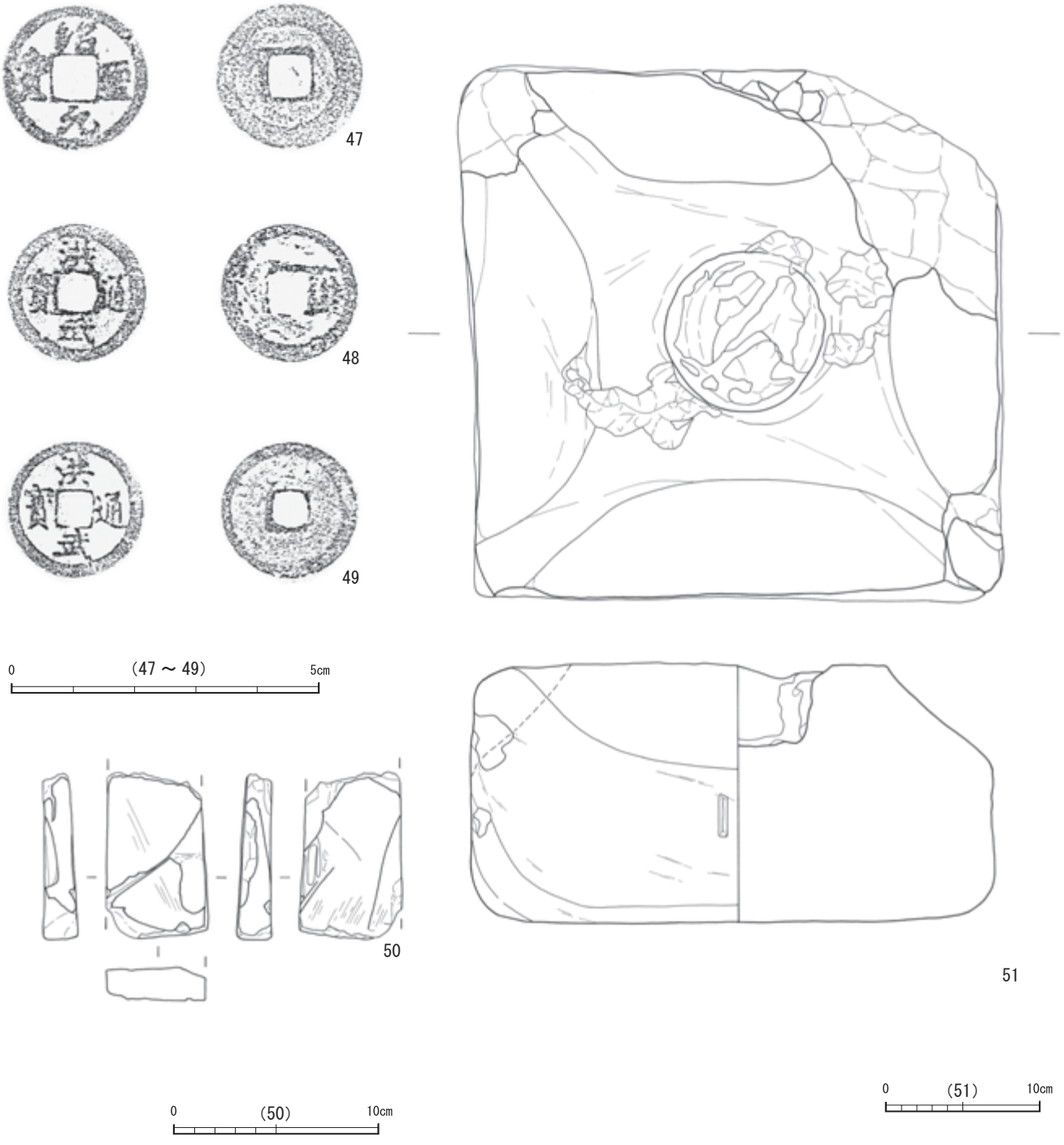
47 ～ 49 は古銭である。

47 は，宋銭で紹聖元寶である。

48・49 は，明銭で洪武通寶である。

50 は，天草砥石である。四面に使用痕があり，破砕と被熱をうけた痕跡が残る。

51 は，五輪塔の火輪である。厚さ 16.7 ㎝と薄手で，下部から直立する中ほどで軒を形成している。軒下は面を取る程度で，軒口は厚く両端で大きく反る。同形状のものは熊本県南部・宮崎県に類例が多く，15・16 世紀のものと思われる。石材は溶結凝灰岩で，薩摩川内市において多く産出されているものと考えられる。



第19図　出土遺物⑤

第５表　土器・土師器・須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区遺構名	層位	種別	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土				色調		備考
							口径	底径	器高	外面	内面	石英	長石	角閃石	赤色粒	外面	内面	
10	2	土坑１	Ⅳ	瓦質土器	擂鉢	完形	28.2	14.2	12.5	ヘラケズリ	－	○	○	○	○	10YR8/2 灰白	外面と同じ	
15	3	Ｂ－７	Ⅲ	土器		胴部	－	－	－	貝殻条痕	－	○	○	○	○	2.5Y3/2 黒褐	2.5Y8/3 淡黄	
	4	Ａ－８	Ⅳ	須恵器		胴部	－	－	－	たたき	たたき	○	○		○	2.5Y5/2 灰黄	5Y7/2 灰白	８C～９C
	5	C-8･9	Ⅲ	須恵器	壺	胴部～底部	－	12.7	－	自然釉	たたき 自然釉	○	○	○		10YR5/4 にぶい黄褐	10YR3/3 暗褐	
	6	Ａ－９	Ⅳ	須恵器	壺	頸部	－	－	－	たたき	－	○	○	○	○	7.5YR7/6 橙 2.5Y4/1 黄灰	外面と同じ	８C～９C
	7	Ｃ－８	Ⅲ	土師器	小皿	底部	－	4.6	－	－	回転ナデ 指ナデ		○	○		5YR6/8 橙	外面と同じ	回転糸切り 14C
	8	Ｂ－５	Ⅳ	土師器	皿	底部	－	7.0	－	－	－		○		○	10YR7/4 にぶい黄橙	外面と同じ	回転糸切り 16C
	9	Ｃ－９	Ⅲ	土師器	埦	高台	－	6.6	－	回転ナデ	回転ナデ	○	○	○	○	7.5YR7/6 橙	外面と同じ	９C～10C
	10	－	表土	土師器	皿	底部	－	9.2	－	－	－		○	○	○	7.5YR7/4 にぶい橙	外面と同じ	８C～９C
16	18	Ｄ－９	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	10.2	7.6	2.3	回転ナデ	回転ナデ	○	○	○	○	10YR7/4 にぶい黄橙	外面と同じ	糸切り
	19	Ｃ－５	Ⅲ	須恵器	鉢･壺	底部	－	－	－	－	－		○	○	○	10YR5/2 灰黄褐	外面と同じ	
17	24	Ｂ－７	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	10.0	8.2	3.0	－	ナデ		○		○	10YR7/6 明黄褐	外面と同じ	回転糸切り
	26	Ｂ－６	Ⅲ	瓦質土器	火鉢 風炉	口縁部	－	－	－	回転ナデ	－		○	○		N6/0 灰	5Y7/1 灰白	
	27	Ｂ－７	Ⅲ	土師器	皿	口縁～底部	19.4	－	－	回転ナデ	回転ナデ		○	○		2.5Y6/4 にぶい黄	外面と同じ	
	29	Ａ－９	Ⅳ	瓦質土器	擂鉢	胴部～底部	－	－	－	－	櫛状沈線	○	○	○		7.5Y5/1 灰	7.5Y8/1 灰白	16C末
18	42	Ｃ－９	Ⅲ	土師質土器		口縁～底部	18.3	－	－	回転ナデ	回転ナデ	○	○	○		10YR7/6 明黄褐	外面と同じ	
	43	Ｃ－６	Ⅲ	土師質土器		口縁～胴部	20.0	－	－	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	○	○			7.5YR7/4 にぶい橙	外面と同じ	
	44	Ａ－６	Ⅲ		土製品	完形	－	－	3.8	－	－		○	○	○	2.5Y/7/4 灰黄	外面と同じ	犬形土製品

第６表　古銭観察表

挿図番号	掲載番号	出土区遺構名	層位	種別	分類	時期	法量（cm）			材質	重量（g）	備考
							銭径	孔径	最大厚			
19	47	Ｃ－９	Ⅲ	銅銭	紹聖元寶	初鋳 1094年	2.4	0.7	0.2	銅	2.3	
	48	Ｂ－８	Ⅳ	銅銭	洪武通寶	初鋳 1368年	2.2	0.6	0.17	銅	2.7	
	49	Ａ－８	Ⅳ	銅銭	洪武通寶	初鋳 1368年	2.2	0.6	0.2	銅	3.5	

第７表　砥石観察表

挿図番号	掲載番号	出土区遺構名	層位	種別	分類	法量（cm）			重量（g）	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
19	50	Ｂ－７	Ⅲ	砥石	天草砥石	8.0	4.8	1.5	110.0	使用痕・破砕後の被熱

第８表　五輪塔観察表

挿図番号	掲載番号	出土区遺構名	層位	種別	分類	時期	法量（cm）			備考
							最大長	最大幅	最大厚	
19	51	試掘３Ｔ	Ⅳ	五輪塔	火輪（笠石）	15･16C	34.4	34.2	16.7	

第９表　陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区遺構名	層位	種別	器種	部位	産地	法量（cm）			調整		色調		時期	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
10	1	土坑１	Ⅳ	陶器	甕	口縁～胴部	薩摩（堂平窯）	17.5	－	－	鉄釉	－	7.5Y6/1 灰	外面と同じ		
15	11	Ａ－６	Ⅲ	白磁	皿	底部	中国	－	5.3	－	透明釉	透明釉	5Y8/2 灰白	外面と同じ	８Ｃ～９Ｃ	高台釉剥ぎ
	12	Ａ－８ ３Ｔ	Ⅳ	青磁	碗	口縁～胴部		－	－	－	緑釉	緑釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	外面と同じ	13C～14C	蓮弁文
16	13	Ｃ－９	Ⅲ	青磁	碗	底部		－	5.8	－	－	緑釉	2.5Y7/1 灰白（内外面）	釉：5GY7/1 明オリーブ灰	８Ｃ～９Ｃ	蛇ノ目釉剥ぎ（内面）
	14	Ｃ－９	Ⅳ	白磁	皿	口縁部	荊窯	－	－	－	透明釉	透明釉	7.5Y8/1 灰白	外面と同じ		
	15	Ｃ－８	Ⅲ	白磁	皿	口縁部		－	－	－	透明釉	透明釉	5Y7/1 灰白	外面と同じ	13C末～14C	口唇部釉剥ぎ
	16	Ａ－９	Ⅳ	白磁	小坏	胴部～底部		－	2.4	－	透明釉	透明釉	2.5GY8/1 灰白	外面と同じ	16C	
	17	Ａ－８	Ⅳ	白磁	皿	底部		－	7.0	－	透明釉	透明釉	2.5GY8/1 灰白	外面と同じ	16C	森田分類皿Ｅ
	20	－	Ⅲ	青花	碗	胴部～底部	景徳鎮	－	4.4	－	透明釉	透明釉	5GY8/1 灰白	外面と同じ	16C末	畳付無釉
	21	Ｂ－６	Ⅲ	青花	碗	口縁～胴部	肥前系	12.0	－	－	透明釉	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	外面と同じ	16C	四方襷文
	22	Ａ－６	Ⅲ	青花	碗	口縁～胴部	景徳鎮	11.6	－	－	－	－	10GY8/1 明緑灰	外面と同じ	16C	
	23	Ａ－８	Ⅳ	白磁	皿	胴部～底部		－	8.8	－	透明釉	透明釉	2.5GY8/1 灰白	外面と同じ	16C	森田分類皿Ｅ
17	25	Ｂ－８	Ⅳ	陶器	壺	胴部	中国	－	－	－	褐釉	－	10YR5/6 黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	14C	
	28	－	Ⅲ	陶器	壺	胴部	中国	－	－	－	褐釉	つなぎ目	10YR6/3 にぶい黄橙 7.5YR4/3 褐	10YR7/4 にぶい黄橙	14C	
	30	Ｃ－９	Ⅲ	陶器	天目碗	口縁～胴部	中国	－	－	－	黒褐釉	－	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙		
	31	Ａ－８	Ⅳ	陶器	小碗	底部		－	3.0	－	上：褐釉 下：暗青灰	－	2.5Y7/2 灰黄	外面と同じ	16C	
	32	Ａ－８	Ⅳ	陶器	壺	胴部～底部	中国	－	12.4	－	－	つなぎ目	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	14C	
	33	－	Ⅲ	陶器	壺	胴部	中国	－	－	－	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR7/4 にぶい黄橙	14C	
	34	Ｃ－７	Ⅲ	陶器	徳利	口縁部	薩摩（苗代川）	24.2	－	－	鉄釉	鉄釉 たたき	7.5YR3/1 黒褐	2.5Y6/2 灰黄		貝目
	35	Ｄ－８	Ⅳ	陶器	甕	胴部	薩摩（堂平窯）	－	－	－	たたき	たたき	5YR4/3 にぶい赤褐	10YR4/4 褐		
	36	Ｃ－９	Ⅳ	陶器	甕	胴部	薩摩（堂平窯）	－	－	－	－	たたき 透明釉	5Y2/1 黒	7.5Y2/1 黒		
18	37	Ｂ－７	Ⅲ	陶器	天目碗	口縁～胴部		11.2	－	－	ヘラケズリ 鉄釉	鉄釉	5Y4/4 暗オリーブ	2.5Y3/3 暗オリーブ褐		
	38	Ａ－９	Ⅳ	陶器	碗	胴部～底部	肥前（唐津）	－	4.2	－	回転ナデ	黒色釉	2.5YR5/4にぶい赤褐 10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y2/1 黒		
	39	Ａ－６	Ⅲ	陶器	擂鉢	胴部	薩摩	－	－	－	－	櫛目	5YR4/1 褐灰	2.5YR4/1 赤灰	江戸	
	40	Ｃ－９	Ⅳ	陶器	甕	口縁部	薩摩（苗代川）	－	－	－	たたき	たたき	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	18C後半	貝目
	41	Ｃ－９	Ⅲ	陶器	壺	口縁部	薩摩	17.2	－	－	白色釉	白色釉	5Y7/1 灰白（内外面）	口縁部 7.5YR4/2 灰褐	17C前半	口縁部釉剥ぎ
	45	Ｂ－８	Ⅳ	陶器	チャツ	胴部～底部	平佐	－	4.1	－	－	－	2.5YR3/2 暗赤褐	5YR4/2 灰褐	19C	
	46	Ｂ－４	Ⅲ	磁器	合子	完形		6.3	3.0	2.8	透明釉	透明釉	蓋：10Y8/1 灰白	身：蓋と同じ	近代	茗荷紋もしくは杏葉紋

第５章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

高野木遺跡の自然科学分析は，平成30年５月に植物珪酸体分析12点をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

第２節　植物珪酸体分析

１　はじめに

高野木遺跡は，鹿児島県薩摩川内市大小路町67番地ほかに所在する。発掘調査は薩摩川内市街部改修事業及び都市計画道路中郷五代線の建設に伴うものである。

これまでの調査で瓦質土器や薩摩焼を伴う近世の土坑や畝間状遺構が検出されている。本報告では畝間状遺構から採取した土壌と土層断面から採取した土壌，下層確認トレンチ内から採取した土壌を対象に植物珪酸体分析を実施した。

２　試料

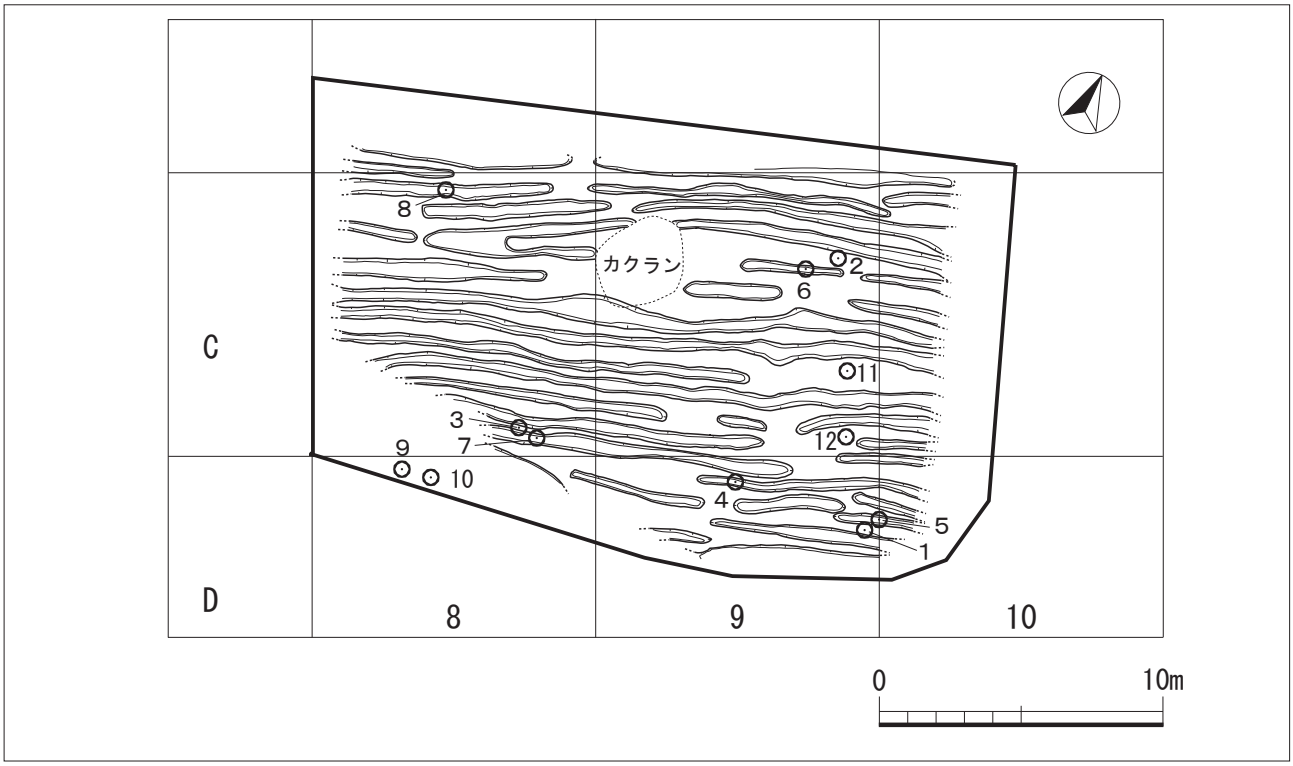
土壌試料は，グリッドＣ－８～10とＤ－８～10より検出された畝間状遺構の畝，畝間，畝間埋土より採取した土壌８点，土層断面のⅢ層，Ⅳ層より採取した土壌２点，先行トレンチ内Ⅵ層上部と下部の２点である。

３　分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）する。試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）。その後，電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理を行う。超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散を行い，沈底法による20μm以下の微粒子除去後，封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成した。同定は，400倍偏光顕微鏡下で主にイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数はガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。また，主な分類群はこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる（杉山，2000）。

４　結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表10及び第21



第20図　分析試料採取位置図

図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

イネ科については，イネ，ヨシ属，キビ族型，ススキ属型（主にススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など），ウシクサ族Ｂ（大型）が確認された。

イネ科－タケ亜科については，メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（主にメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等が確認された。

イネ科－その他については，表皮毛起源，棒状珪酸体（主に結合組織細胞由来），未分類等が確認された。

樹木については，ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），アワブキ科などが確認された。

５　考察

（1）　稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。なお，畑稲作（陸稲栽培）の場合は，連作障害や地力の低下を避けるために輪作や休閑期間をおく必要があるため，イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり，1,000 ～ 2,000 個 /g 程度である場合が多い（杉山，2000）。

遺構検出面では，Ｖ層（畝，畝間）とⅣ層（畝間埋土）から採取された№１～№８について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出されたが，密度は600 ～ 2,000個/gといずれも低い値である。イネの密度が低い原因としては，①稲作が行われていた期間が短かったこと，②土層の堆積速度が速かったこと，③稲藁が耕作地以外に持ち出されていたこと，及び④畑稲作（陸稲栽培）であったことなどが想定される。ここでは，遺構の状況などから④の要因が大きいと考えられる。土層断面では，Ⅲ層～Ⅵ層から採取された№９～№12について分析を行った。その結果，すべての試料からイネが検出されたが，密度は600 ～ 1,500個/gといずれも低い値である。イネの密度が低い原因としては，前述のようなことが考えられる。

（2）　イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる），オヒシバ属型（シコクビエが含まれる），モロコシ属型，トウモロコシ属型などがあるが，これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため，その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

（3）　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では，イネ科のヨシ属，ススキ属型，ウシクサ族Ａなど，タケ亜科のメダケ節型，ネザサ節型など，樹木のブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），クスノキ科などが認められたが，いずれも比較的少量である。なお，植物珪酸体の組成や密度は，地点や層準による特に大きな差異は認められなかった。以上の結果から，各層準の堆積当時は，おおむねヨシ属が生育する湿潤な環境であったと考えられ，周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やウシクサ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育していたと推定される。また，遺跡周辺にはシイ属，イスノキ属，クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

（4）　まとめ

植物珪酸体分析の結果，遺構検出面のＶ層（畝，畝間）とⅣ層（畝間埋土）及び土層断面のⅢ層～Ⅵ層では，分析を行ったすべての試料からイネが検出され，調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。遺構の状況などから，ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であった可能性が考えられる。

各層準の堆積当時は，おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であり，周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やウシクサ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育し，遺跡周辺にはシイ属，イスノキ属，クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

〈引用文献〉

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，P69-84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38（２），P109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，P189-213.

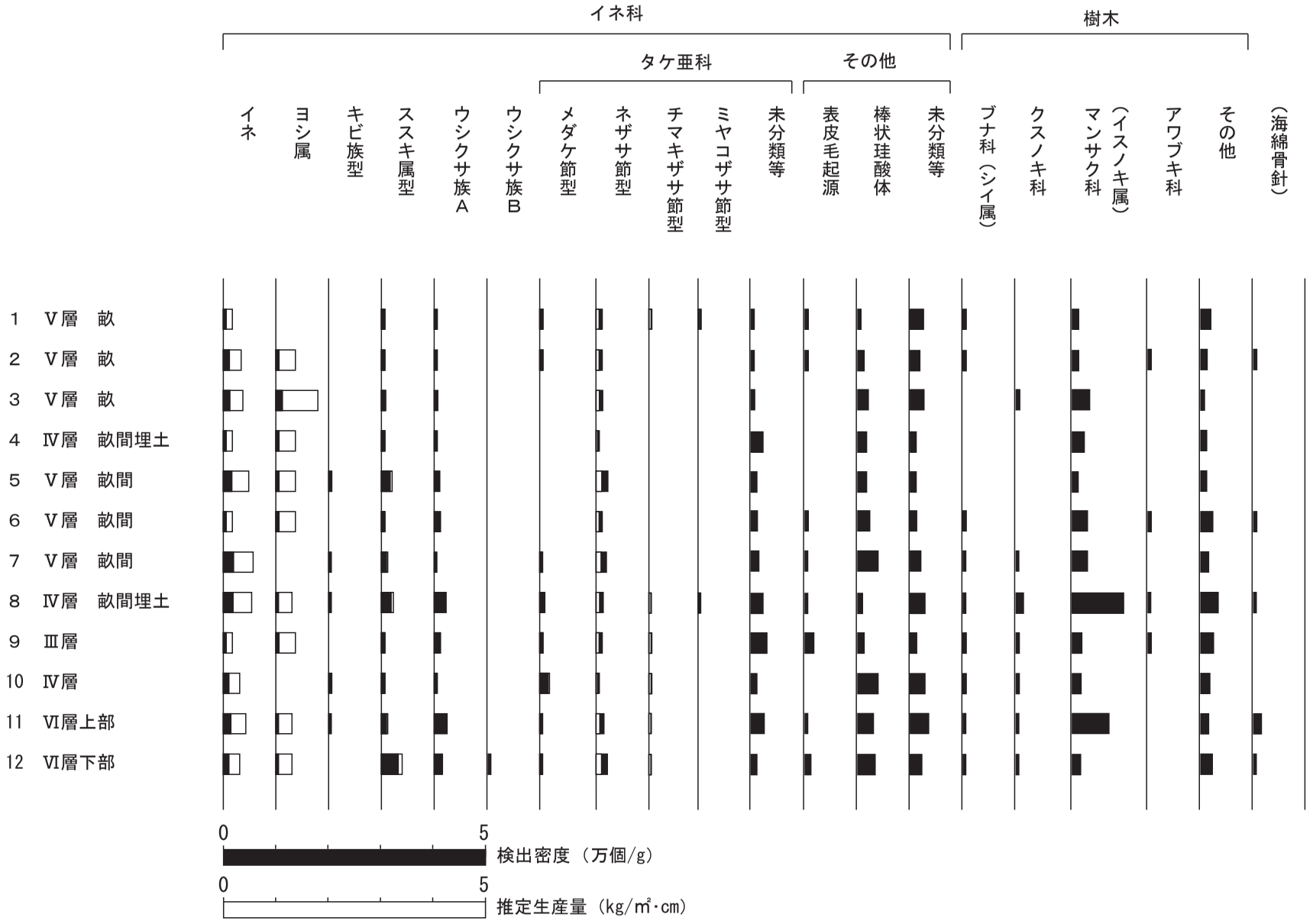
杉山真二（2009）植物珪酸体と古生態．人と植物の関わりあい④．大地と森の中で－縄文時代の古生態系－．縄文の考古学Ⅲ．小杉康ほか編．同成社，P105-114.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，P15-29.

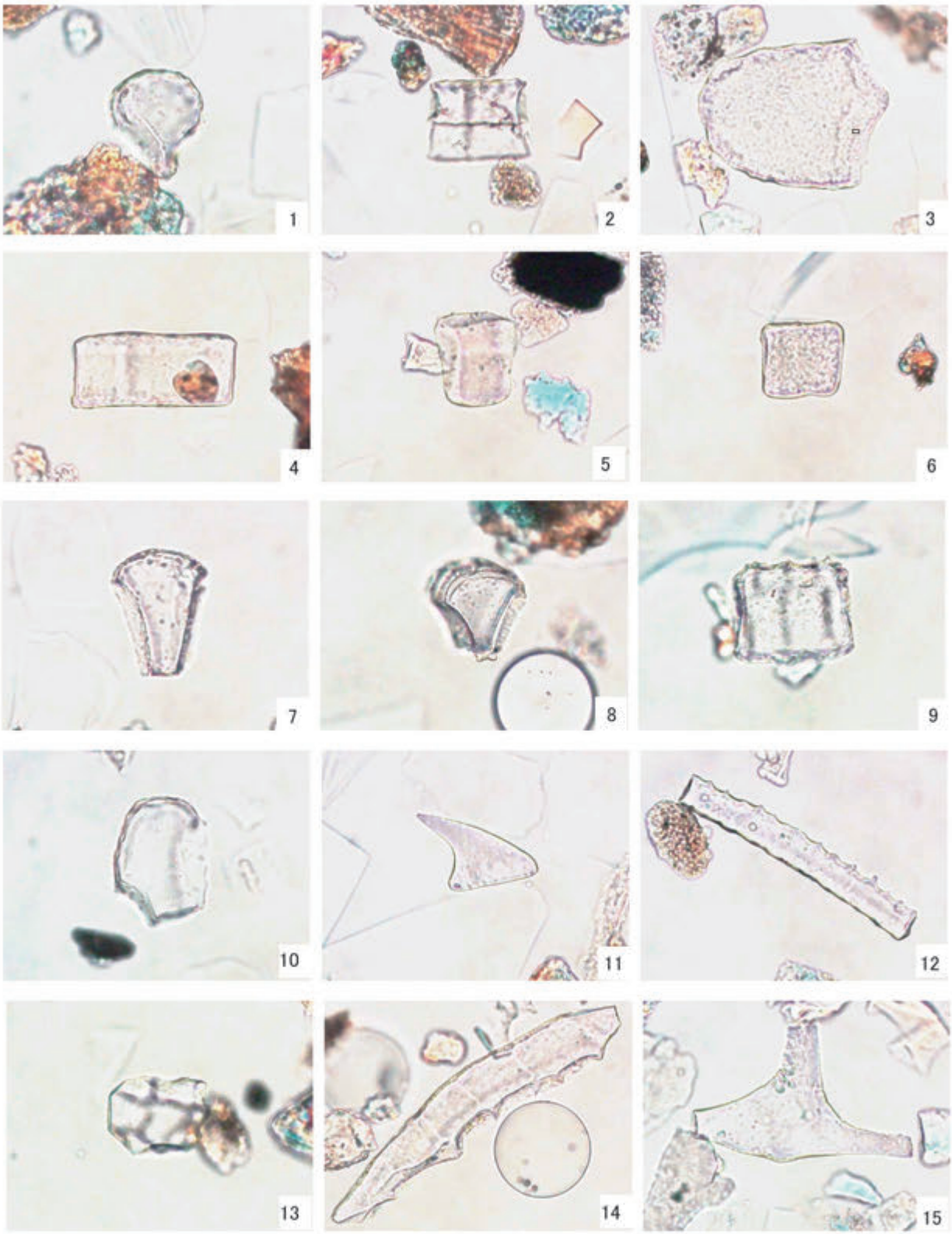
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，P73-85.

第10表　植物珪酸体分析結果

分類群	学名	地点・試料 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科	Gramineae												
イネ	*Oryza sativa*	6	12	13	6	17	6	20	19	6	11	15	11
ヨシ属	*Phragmites*		6	13	6	6	6		5	6		5	5
キビ族型	Paniceae type					6		5	5		6	5	
ススキ属型	*Miscanthus* type	6	6	7	6	17	6	10	19	6	6	10	33
ウシクサ族Ａ	Andropogoneae A type	6	6	7	6	11	12	5	23	12	6	25	16
ウシクサ族Ｂ	Andropogoneae B type												5
タケ亜科	Bambusoideae												
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	6	6					5	9	6	17	5	5
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	12	12	13	6	23	12	20	14	12	6	15	22
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	6							5	6	6	5	5
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	6							5				
未分類等	Others	6	6	7	23	11	12	15	23	30	11	25	11
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin	6	6				6	5	5		17	5	11
棒状珪酸体	Rod-shaped	6	12	20	17	17	23	39	9	12	39	30	33
未分類等	Others	25	18	26	11	11	12	20	28	12	28	35	22
樹木起源	Arboreal												
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*	6	6				6	5	5	6	6	5	5
クスノキ科	Lauraceae			7				5	14	6	6	5	5
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*	12	12	33	23	11	29	29	98	18	17	70	16
アワブキ科	Sabiaceae		6				6		5	6			
その他	Others	19	12	7	11	11	23	15	33	24	17	15	22
(海綿骨針)	Sponge spicules		6				6		5			15	5
植物珪酸体総数	Total	130	124	151	115	141	156	196	322	167	196	273	229
									検出密度（単位：×100個/g）				
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出													
イネ	*Oryza sativa*	0.18	0.35	0.39	0.17	0.50	0.17	0.57	0.55	0.18	0.33	0.44	0.32
ヨシ属	*Phragmites*		0.37	0.83	0.36	0.36	0.37		0.29	0.38		0.31	0.34
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.08	0.07	0.08	0.07	0.21	0.07	0.12	0.23	0.07	0.07	0.12	0.41
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.07	0.07					0.06	0.11	0.07	0.19	0.06	0.06
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.06	0.06	0.06	0.03	0.11	0.06	0.09	0.07	0.06	0.03	0.07	0.10
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.05							0.04	0.04	0.04	0.04	0.04
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02							0.01				



第21図　植物珪酸体含量の層位分布



第22図　植物珪酸体

1. イネ（Ⅴ層 畝間）
2. イネ（側面）（Ⅳ層 畝間埋土）
3. ヨシ属（Ⅳ層 畝間埋土）
4. キビ族型（Ⅵ層 上部）
5. ススキ属型（Ⅵ層 下部）
6. ウシクサ族Ａ（Ⅲ層）
7. メダケ節型（Ⅳ層 畝間埋土）
8. ネザサ節型（Ⅴ層 畝間）
9. ネザサ節型（Ⅴ層 畝間）
10. チマキザサ節型（Ⅳ層 畝間埋土）
11. 表皮毛起源（Ⅳ層 畝間埋土）
12. 棒状珪酸体（Ⅴ層 畝間）
13. ブナ科（シイ属）（Ⅴ層 畝）
14. クスノキ科（Ⅵ層 下部）
15. マンサク科（イスノキ属）（Ⅵ層 下部）

第６章　総　括

１　層位

Ⅲ層からⅧ層までが砂層基調の河川堆積物の様相を示し，Ⅲ・Ⅳ層が遺物包含層である。「川内川右岸では何列かの旧河道が川内川河道に平行するように直線状に伸び蛇行河道は示さない」（2005森脇広「京田遺跡周辺の地形・地質と古環境」）とあるように，本遺跡は，川内川氾濫の影響を複数回受けていると考えられる。また，近隣で川内川右岸の大島遺跡や同左岸の鍛冶屋馬場遺跡の層位とも異なり，川内川流域で氾濫の影響を最も受けた層位と言える。

２　遺構

遺構は，土坑と畝間状遺構を検出した。土坑１号はⅣ層面で検出し，埋土はⅢ層である。埋土内から完形の瓦器質擂鉢と薩摩焼（堂平窯系）が出土し，近世初頭の遺構であると判断した。畝間状遺構は，Ⅴ層上面で検出し川内川の流れに沿って，調査区全域に広がる。埋土内に遺物はなく，畝間も浅く砂層であるため耕作痕などは確認されていない。畝が途切れる部分には，畠境を区切る役割を果たすような遺構（杭跡や植林跡など）も確認できなかった。畝間状遺構は，土坑１号に切られ，先行トレンチ６から摩耗した青磁片が出土したことから，中世相当と判断した。また，畝間状遺構は，方向と列を考慮すると約 80 条になる。第 11 表に示したように，鍛冶屋馬場遺跡など川内川流域の遺跡とは類似性があるが，検出した条数の規模では群を抜いている。川内川流域では，遺跡の範囲に対して畝間状遺構の密度が高いと言える。また，畝間状遺構が本遺跡の調査範囲周辺に広がる可能性が高い。畝・畝間・畝間埋土の自然科学分析（植物珪酸体）を実施したところ，陸稲栽培が行われていた可能性が示された。川内川流域の土地利用と生業を考える上で貴重な知見となった。

３　遺物

本遺跡の遺物量は少なく，河川による影響を受けたものも見られる。主体となる時期は，中世から近世であるが，古代の土師器なども出土した。Ⅲ層が近世，Ⅳ層が古代から中世の遺物包含層相当になるが，出土層位が逆転している遺物もある。また，底部や胴部に対して口縁部の出土量の比率が低い。土坑１号から出土した完形の瓦器質の擂鉢は，内部が摩耗し櫛目が確認できない状況であるが，外面の形痕は明瞭に残存している。河川による摩耗はなく，使用によって櫛目が摩滅したものと考えられる。

第11表　遺跡周辺及び自然堤防上に位置する畝間状遺構

遺跡名	時期	条数	方角	備考
鍛冶屋馬場	古代	11条	南北	川内川岸左岸自然堤防
川骨	中世	14条	東西・南北	川内川岸自然堤防
大島	中世	８条	南北	川内川岸右岸自然堤防
上野城跡	中世以前 中世	110条 81条	東西 東西・南北	百次川と山崎川間の独立丘陵
山口	中世	40条	南北	木場谷川と都川間の台地
持躰松	古代 中世	120条 282条	東西 南北	万之瀬川右岸自然堤防

４　遺跡の残存状況等

本遺跡は，薩摩川内市街部改修に伴う調査であり，調査終了後は工事が着工され，現在は大小路地区の堤防と中郷五代線となっている。本調査の結果，畝間状遺構が良好に残存していたため，遺跡範囲は広がる可能性が高い。民家が密集している立地でもあることから，今後も開発事業が及ぶ場合は分布調査等を行い遺跡域の把握に努める必要がある。

〈参考・引用文献〉

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(39)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(68)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(80)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『京田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(81)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2011『川骨遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(165)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2013『山口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(179)

日本考古学協会2000年度鹿児島大学実行委員会2000『はたけの考古学』日本考古学協会二〇〇〇年度鹿児島大会資料集　第一集

写　真　図　版

図版 1







①調査前風景　　②土層断面（C・D－8～10 区）　　③作業風景

図版２





①畝間状遺構検出状況（Ａ・Ｂ－５～７区）　　②畝間状遺構完掘状況（Ａ・Ｂ－５～７区）



畝間状遺構完掘状況（Ｃ・Ｄ－８～10区）

図版４













①土坑１号・２号検出状況　②土坑１号埋土堆積状況　③土坑１号遺物出土状況
④土坑２号埋土堆積状況　⑤土坑２号完掘状況　⑥土坑１号・２号完掘状況





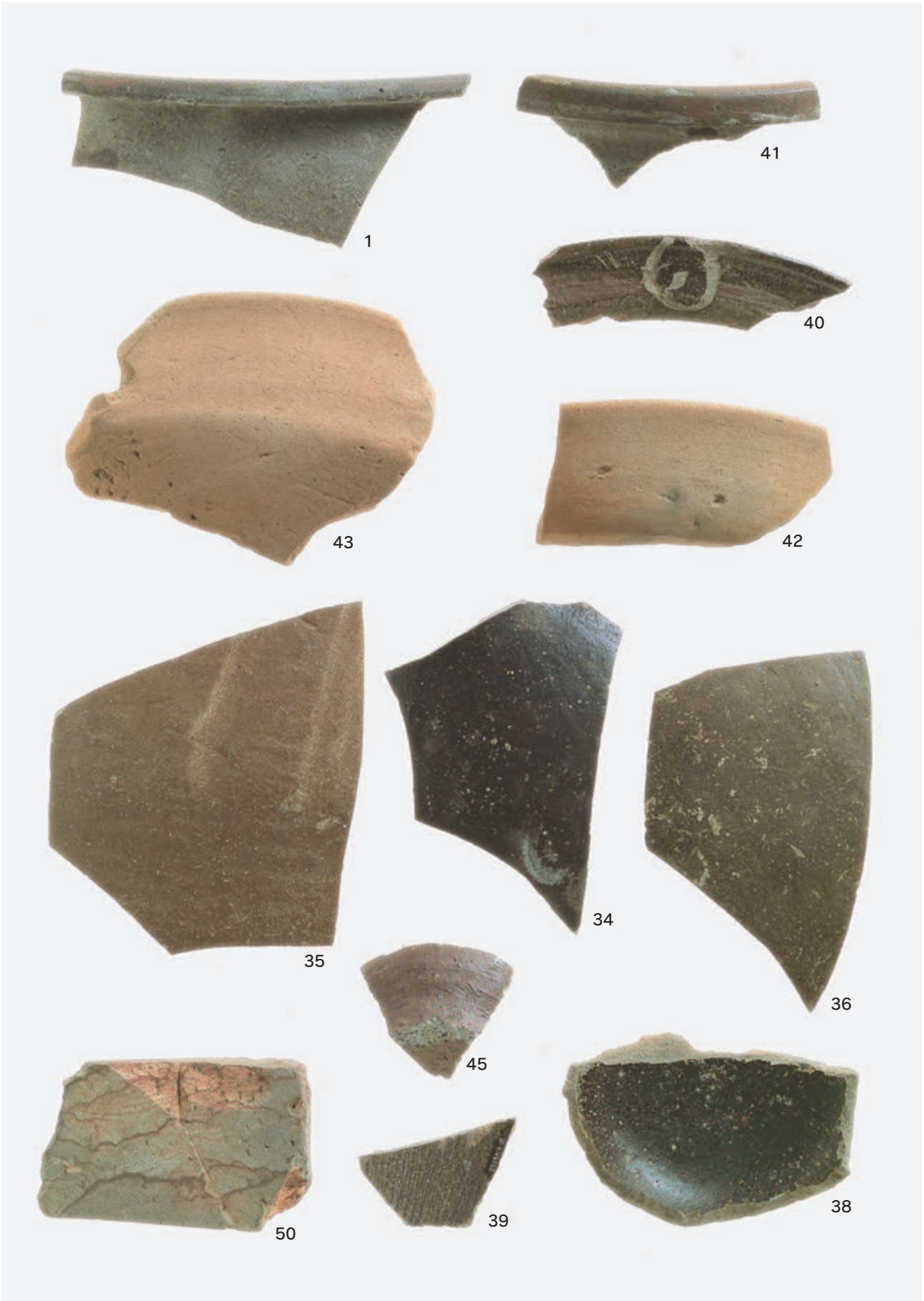


遺構内遺物・動物形土製品・五輪塔（笠石）

図版６



土器・土師器・須恵器



陶磁器①・砥石

図版８



陶磁器②・瓦質土器・古銭

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（21）
薩摩川内市街部改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高　野　木　遺　跡

発　行　年　　２０１９年１月

編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576

印　　刷　　濱島印刷株式会社
〒890-0052　鹿児島県鹿児島市上之園町17番地２
TEL　099-255-6121


鹿児島県